金柑の木のある庭

南水　梨絵

連綿と続いている日常の、あるはずのない隙間に入り込んでしまったかのような違和を感じはじめたのは、いったいいつ頃だっただろうか。

最初にその感覚を捉えたときのことはおぼろげながら覚えている。わたしは帰りの電車に乗っていて、あとすこしで最寄りの駅に着く頃合いだった。唐突に、これまで一度も感じたことのない、車体の揺れとともにすこしずつ空間がぶれていくような感覚があって、戸惑っているうちにぶれは収まっていたものの、そのぶれによって生じたもうひとつの空間が、ほんのちょっとずれたままどこかに行ってしまったような、そんな気がした。それからというもの、自分は本来いるべきではない方の空間に来てしまったのではないかという思いが拭いきれず、それがわたしの感じている違和の正体なのだった。

気のせいだと断じてしまうのはかんたんなのだけれど、というより、常識的に考えれば気のせいでしかないはずなのだけれど、どうしても気の迷いだけで説明できないような不調和が、わたしの周囲に浸透しているのだった。

それはたとえば、もう三年もつき合っている恋人の涼太くんが、わたしのてのひらに何気なくのせた、ひとくちサイズのチョコレートだったりする。

コンビニエンスストアに立ち寄ったついでに小袋のお菓子なんかを買っておくのが彼の癖で、そういったものを仕込んでおくことはいろいろな局面で物事を円滑に進めるためにとても便利だという彼の持論はよく知っていたから、何の前触れもなく飴やグミをくれるのはふしぎには思わないし、それどころかむしろ微笑ましいとさえ感じる。だが問題なのは、そのひとくちサイズのチョコレートがわたしの嫌いなバナナ味だったことだ。

わたしたちは、大げさにいえば互いの苦手なものでしりとりができるくらい相手のことを理解していたし、苦手の度合についても、それをジョークにしていいのかどうかという線引きくらいちゃんとできているはずだった。それはいっしょに過ごした日々のなかで自然に確認し合った共通認識で、こちらの一方的な勘違いなどではないはずなのだ。なのに、いまさら彼が冗談でバナナ味のチョコレートを渡してくるなんて、どう考えたっておかしい。わたしは、どうしてこの味を選んだのか尋ねてみた。すると涼太くんは、

「バナナ、嫌いだっけ？」と、さらりといったのだった。

そのときの、そんなことははじめからまったく知らなかったというような、屈託のない語調と表情は、思いのほかわたしを傷つけたのだった。

それは、人に話せば「それしきのこと」といわれるようなちっぽけなことかもしれないけれど、「それしきのこと」をめいっぱい重ねて作り上げてきたはずの現在のわたしたちの関係が、根っこの方から崩れてしまったように、思えたのだ。

それだけではない。

職場でのちょっとした力関係がこれまでと明らかにちがっていると思えるようなことがあったり、駅前のビルに入るテナントが突然まるきりちがう店舗に入れ替わっていたりした。あの電車での出来事から三か月ほどのあいだにわたしが見つけた小さな異変は、両手では到底数えきれないくらいにたくさんあった。

それらひとつひとつの事柄は、普段なら気にも止めない、取るに足りないものばかりだった。けれども、だからこそむしろそういった細部の異なりが、まるで向こうの方から目にとび込んでくるかのようにくっきりと浮かび上がって見えてしまうのだった。

わたしには、自分がぼんやりとしているあいだに世界が様相を変えてしまったかのよう

に思えてならなかった。あのとき、電車の揺れによって生じたほんの小さなひずみのせいで、わたしを取り巻くこの世界は、誰にも気づかれないままわずかにちがってしまったのではないだろうか。霧でできたヴェールのようにわたしの面前にうっすらと張った疑念の幕は、ゆらゆらとゆらぐたびにその濃さを変えるものの、完全に晴れることはないのだった。

抱きかかえるようにして枕の下に差し入れた手にしびれを覚えて目を覚ますと、部屋じゅうに光が満ちあふれていて、そうこうしているうちに光の密度がみるみる高くなっていくものだから、あまりにも眩しくてふたたび毛布にもぐり込んだら、はっとなってもう一度目が覚めた。洗い立てのカバーをつけた枕はちゃんと頭の下にあって、なのにやっぱり腕はびりびりとしびれているのでよく見てみると、伸ばした手首の辺りに猫のハルミチが乗っていた。もう一方の手を使って彼をぐいっと向こうに押しやり、下敷きになっていた腕を救い出した。カーテンの隙間から漏れた光が一筋毛布のうえで弱々しく揺れていたけれど、光が満ちあふれているというほどではなかった。目覚める直前に見た夢のなかで先に目覚めたことが、現実のわたしを眠りから覚まさせたのかもしれない、というちぐはぐな状況についてぼんやり考えていると、すこしずつあたまが冴えてきた。

ベッドから出て、珈琲を淹れるために台所へと向かう。そのついでに、そこが定位置である、スケッチブックを立て掛けたイーゼルの、脚の内側に置いたハルミチ用のえさ皿を回収する。えさ皿はいったん調理台にのせておき、食器棚に近づいて、ちょうど目の高さにある引き違いの扉を開けて珈琲豆とカップを取り出すと、それを腿で支えながらしゃがみ込んで、今度は下の開き戸の奥から煮干しをひっぱり出した。

この煮干しは随分前に涼太くんが買ってきたものだった。彼の厚意を無下にするつもりはなかったが、ハルミチは煮干しを食べないのだということを正直に教えると、彼は目を丸くして、「煮干しを嫌いな猫がいるの？　信じられない！」と大げさな身振りを加えて抗議した。人間がひとりひとり違うように猫にだって個体差があるものなのよ、と丁寧に説明したらしぶしぶ納得したみたいだったけれど、それ以降も、わたしの目を盗んでこっそりハルミチに煮干しを与えようとしているところを何度か見かけたから、どうしても例外を認めたくなかったのかもしれない。どちらにしろ、煮干しはやりすぎると良くないというからずっと戸棚にしまっていた。ところが、このあいだやっぱり同じように涼太くんがハルミチ用の皿に煮干しを二、三本入れているのを目撃した。どうせいつものように知らんぷりされるのだろうなと思って見ていたら、いつになく興味を示したハルミチが煮干しに鼻をくっつけて匂いをかいで、その勢いでぱくりと口にくわえたのだった。えっと思わず声が出てしまうくらいに驚いたわたしは、ハルミチに向かって「なんで、なんで、なんで」としつこく問い質した。涼太くんは、ハルミチが食べようとした煮干しをひょいと取り上げて相手をからかいながら、あたり前じゃない、といった。「煮干しを嫌いな猫がいるの？」

それ以来、ハルミチが煮干しを催促して戸棚を引っかくものだから、毎日はあげられないからねと念を押したうえでときどきやることにしたのだ。戸棚を開ける音を聞きつけてすでに足もとにすり寄ってきていたハルミチを制し、皿に煮干しを入れ、床に置いた。煮干しにとびつくハルミチを見ていると、彼はもとからそれが大好物だったのではないかと思えてくる。「煮干しが嫌いなハルミチくんはいったいどこへ行ったんだろうね」と淡い茶色の毛を撫でてやると、相手は喉を鳴らして返事をした。

ハルミチがあっという間に煮干しを食べてしまうのを見届けると、ペーパードリップで珈琲を淹れた。ふしぎなことに、どれだけ周囲に違和を感じていても自分の嗜好はまった

く変わらないのだった。
珈琲とトーストだけの簡単な朝食を終えると、歯を磨きながらイーゼルの前に腰掛けた。この１ＬＤＫの部屋はひとりで暮らすには持て余すほどに広いけれど、築年数が少々古く最寄りの駅から遠いこともあって、家賃はそう高くない。この部屋に決めたのは、イーゼルを置いたときのイメージがぱっと頭に浮かんだからだ。その印象は正しかったようで、部屋にあるどの家具よりもいちばんここに馴染んでいた。
折りたたみ式の丸椅子に座ったまま、壁際の棚に手を伸ばす。棚の上には白い木枠の写真立てを飾ってあって、志望校に合格したときに両親と三人で撮った写真と、子猫の頃のハルミチの写真を並べて挟んである。その手前に、古い友人から海外旅行のお土産でもらった派手な装飾の小物入れがあり、そのなかから、指先で引っ掛けるようにして腕時計を取り出した。これは就職祝いとして両親からプレゼントされたもので、ときどき修理に出しながらも大事に使っている。
はぶらしをくわえたまま左手首に時計をはめて、洗面所に移動する。歯磨きを終えるとダイニングに戻り、テーブルのうえのスマートフォンを取り上げた。母親からメールが来ていた。「梅干しいっぱいあるけど、いる？」朝早くからメールを送ってくるほど、元気らしい。手早く「よろしく」と打ち返し、椅子に置いてあった鞄を肩に掛けると、足もとにやってきたハルミチの頭にぽんと軽く手を触れてから、家を出た。
電車をひとつ乗り換えて勤務先の学校に向かう。駅前から続いている、ゆるやかに湾曲した坂を上っていくと、丘の中腹あたりに、雨風に晒されてくすんだ校舎の壁が見えてくる。
七年前に教員免許のとれる四年制の大学を出たわたしは、非常勤講師として神奈川県の公立中学校に三年間勤務したあと、たまたま美術教師を募集していたこの私立中学校の採用試験を受け、うまい具合に合格した。
「藤井先生は運がいい」
掛谷校長は事あるごとにわたしを指して、運がいいという。
「受験以上の倍率をかいくぐって採用されたんですからね」
それを運がいいと表現するならば、教師の採用基準はすべて運だということになってしまうが、裏を返せばそれだけ美術教師の募集が少ないのだともいえる。とはいえ、たしかに自分の提出した書類がほかの誰のものよりも目を引いたとは思えず、もしかしたら、面接を担当した校長と理事長が気まぐれに遊び心を働かせて、トランプのカードを一枚引くかのように目をつぶって引き当てたのがたまたまわたしの履歴書だったのかもしれない、などと疑ってしまうくらいに、そこには運の要素が少なからず入り込んでいるような気がした。自分でも、わたしは運がいいのだと思う。ただ、運がいいのが果たして良いことなのかどうかは甚だ疑問ではあるけれど。
そんなわけで、昨年創立八十周年を迎えたこの中学校で、わたしは自分のささやかな美術の知識を生徒に分け与えるという役目を担っている。全学年の美術の授業のほかにも、二年生の副担任と美術部の顧問を受け持っている。
二学期が始まってしばらく経ったいまの時期は、来月に行われる文化祭へ向けての美術部の制作活動が大いに活発になってくる頃でもあって、一年のうちでもっとも忙しい時期だった。普段は週に二回しかないクラブだけれど、毎日通ってくるほど気合いの入った生徒も多かったので、わたしも放課後はかならず美術部に顔を出すことにしていた。
きょうは六時間目の授業の受け持ちがなかったため、職員室での業務を済ませてしまうと早めに美術室へ向かった。誰もいないのを確かめると、準備室から運んできたイーゼルを教卓の横に据え、パイプ椅子に座った。そして、気が向いたときにだけ描いている、も

うずいぶん長いあいだ制作中の作品に絵の具を足していった。
「藤井先生」
声をかけられてはじめて背後に生徒が立っていることに気がつき、はっとして振り返った。わたしが肩を震わせて驚いたのがおかしかったのか、相手は口もとに手をやってくすりと笑った。室内には、いつのまにか部員が集まってきていたようだ。
「ねえ先生」
西野という名のその女生徒はしつこく口もとに笑みを浮かべていて、どうやらそれはわたしの態度を笑っているのではなく、もともと楽しいことを抱えていて、それが抑えきれずにあふれ出してしまっているといった様子だった。
「先生は卵焼きは砂糖派？　それとも出汁派？」
何を聞いてくるのかと思えば、そんなことだった。けれどもこの年代の子どもたちは、こちらがくだらないと思えるような内容で笑い転げたり、真剣な顔で議論し続けたりできるものなのだ。わたしが出汁派だと答えると、西野さんは近くの作業台に集まった数人の仲間に向けてガッツポーズをしてみせ、「ほら！」と声を張り上げた。それと同時に彼らからわあっと歓声が上がった。どっち派ということでひとりでも多くの仲間を引き入れるために実地調査に乗り出した、といったところだろうか。
「やっぱり藤井先生は出汁派だった」
西野さんがこちらに向き直り、嬉しそうに笑った。彼女は二年生で、わたしが副担任をしているクラスの生徒ではなかったが、時折廊下ですれ違ったときなどに、こんな風に何でもないことをふっと聞いてくることがあった。
「ほんとうのことをいうと」わたしは彼女の頬にうっすらと浮かぶそばかすを見つめながらつけ加えた。「卵焼きは塩派なんだけど」
西野さんは目を見開いて、「へえ！」といった。
「母の卵焼きがそうだったのよ」
「へえ」
西野さんはもう一度そういうと、口もとを綻ばせたままちょっと照れたような表情を浮かべ、視線をそらした。そのまますぐに仲間のところに戻ると思ったのに、なぜか彼女はわたしの傍に留まり、肩越しに絵を覗き込んできた。
「先生の絵、すきだな」
「そう？　ありがとう」
生家にある金柑の木を描いたものだった。わたしの生家である大阪の祖父母の家には、いまは誰も住んでいないため何年も足が遠のいていたが、裏庭に植わった小さな金柑の木だけは鮮明に記憶にあった。ところが、描けば描くほどに記憶のなかのしなやかでやさしい木とはかけ離れていき、重すぎるくらいに力強い印象ばかりが際立っていってしまうのだった。だが、潮時を逃してしまったのか描き終えるにはまだ何かが足りない気がして、いつまでも手を入れ続けていた。
「ねえ先生」西野さんがあらためて呼びかけてきた。その声は、ミュートを取り付けた弦楽器のようにぎゅっと絞られていた。「誰かに聞いてみたいと思ってたことがあるんだ」
わたしはそっと振り返った。
「たとえばね、からだの一部がない状態で生まれてくることがあるように、心がない状態で生まれてくる人間もいるの？」
彼女は、天然のものであるという証明書を提出させられたと、いつだったか悔しそうな顔をして語っていた、細かくウェーブする髪を引き伸ばすように高い位置で結んでおり、それは彼女が身体を動かすたびに左右にふわりと揺れた。

美術室にはほとんどの部員が揃っていて、放課のあとの浮ついたざわめきに包まれていた。にもかかわらず、西野さんとわたしとのあいだには静まり返った空気が流れているように感じられた。

わたしはすこし迷ったあと、西野さんに傍らの椅子を勧め、絵筆を置いてそちらに向き直った。相手は、おそらくそれが癖になっているのだろう、やや左側にからだを傾けながら椅子に座った。彼女は生まれつき左手の親指を欠損していた。

「そんな人間はいない」

西野さんのまっすぐなまなざしを受け止めながら、淀みなく答えた。そして、十代の若者に「納得した」と思い込ませる程度に適当で、且ついいかげんな解説を加えようとした。ところが、西野さんはこちらの答えそのものには興味を示さず、質問を重ねた。

「ふーん。でも、なんで先生はそれを知ってるの？」

わたしは躊躇した。どうしてそれを知っているのか？　その問いに安易に答えることは、自分の中身を不用意に差し出すのと同じことのように感じられた。

「先生？」

西野さんがこちらの表情を窺うような素振りを見せた。

「知っているから知っているのよ」わたしは彼女からそっと目をそらし、答えた。「たとえばね、白い絵の具に筆の先をちょんとつける程度の黒を加えると、限りなく雲の色に近づくでしょう。そのことを知識として知っていたとしても、どれだけの黒を加えればいいのかを見極めるには、結局のところ感覚を頼るしかない。それとおんなじ」

西野さんは、今度は「へえ」とはいわなかった。相変わらず顔は笑っていたけれど、頬に赤みが差していて、混乱しているのがみてとれた。わたしはその彼女の変化には気づかないふりをして、これで話は終わりだというのを示すように眉を上げてみせた。西野さんは素直に立ち上がって仲間のもとへ戻っていき、何事もなかったかのように制作の準備をはじめた。

しばらく経ってから、気を取り直すようにイーゼルはそのままにして立ち上がった。そして、教室をゆっくりと歩きながら、生徒たちの作品を覗き見ていった。教卓を出発点にして廊下側からぐるりとまわっていく。すると、教室後方の窓際に西野さんが座っているのが目に入った。無視して通り過ぎるわけにもいかない。そばに寄ると、彼女は自然な動作でこちらを振り向き、このくらいの年齢の多くの子たちがそうするように、いま自分のやっていることはすべて照れくさくこそばゆいことなんだといわんばかりにちょっとはにかんで、またすぐ作品に向き直った。

わたしは、彼女が夏前から取り組んでいる、完成しそうでいつまでも完成させられない油彩画に視線を移した。そこには、帰宅途中にあるという大きな橋の、太く美しい橋脚が描かれているはずだった。なのに、いま筆先が触れようとしているキャンバスに描かれているのは、やや憂いを含んだ表情をして斜め後ろに視線を投げかけようとしている、彼女自身の横顔なのだった。

「西野さん……、」思わず呼びかけてしまったけれど、何をいうべきかわからず、適当な褒め言葉を添えた。「これ、ここの頬の質感がとてもいいね」

「ありがとうございます」

「ところで、その絵いつ描き直したんだっけ？」

「え？」

「前はほら、橋の絵を描いていたでしょう」

「橋、ですか？」

西野さんは黒目をきょろきょろとさまよわせ、当惑の表情をみせた。

「ああ、わたしの勘違いだったわ。ごめんなさい、いいの」
早口でそういって、その場を離れた。
上部が嵌めごろしになっている、天井近くまである背の高い腰窓に沿って、よろよろと教卓に向かう。開いた窓の隙間から入った秋の風が卵色のカーテンをやわらかく押し上げて行く手を阻むものだから、立ち止まって両手で抱え込み、タッセルを巻き付ける。そして、タッセルを房掛けに引っかけようと何気なく視線を移したわたしの目は、窓の外のある一点をとらえ、停止した。
美術室の外には造り付けの花壇があって、そこには見頃を迎えたチョコレートコスモスが可憐に花を咲かせているはずだった。ところが、それがつつじらしき植え込みに変わっていたのだ。
脳が錯覚を起こしたかのような感じがして、足もとがふらついた。気を沈めながらさりげなく教室をふり返ってみたけれど、こちらを注視している生徒は見当たらなかった。
わたしはひとつ、ため息をついた。
西野さんの絵にしたってこの花壇にしたって、わたしの目には、たしかにあったはずのものが予告もなくきれいに消えて、知らないうちにそうではなかったはずのものに置き換えられてしまったかのように見える。けれども、誰も同じように驚いていないということは、この状況の方が正常なのであって、こちらの記憶がおかしいのだと考えざるを得ない。
わたしはいったん教卓に戻り、膜が張ったように動きがにぶくなってしまった頭でこれらの状況について合理的に説明する手立てを考えてみた。だが、どうやってもうまい説明は思いつかなかった。結局のところこれまでと同じように、自分自身とどのように折り合いをつけるかという問題に終始するのだった。
目をつぶる、ということばがあるけれど、たとえば他人の欠点に目をつぶるように、わたしの周囲に浮かびあがる違和に目をつぶることができれば、どんなにいいだろう。そう思いながら、実際にそうしてしまえば解決するかのように、わたしは教卓に手をついて、まぶたの重みを感じながらゆっくりと目をつぶった。ところが、まぶたの奥の暗闇を見た途端に言いようのない恐怖が全身に広がり、まばたきと変わらないくらいの速さでふたたび目を開いた。するとそこには何も変わらない、部活動に励む生徒たちの姿とにぎやかな声があった。なのに、わたしにはもう、「変わらない」ということがどういうことなのか、さっぱりわからなくなってしまっているのだった。

このところ、わたしの内面は起き上がり小法師のようにどっちつかずに揺れていて、このまま時間の流れに身を任せていればいつしか解決されるはずだという思いと、いやそんなことでは駄目だという思いが、膨らんだり縮んだりしながらわたしを悩ませ続けていた。また、自分の置かれた状況をうまく説明できる気もしなくて、違和についてはまだ誰にも話せていなかった。
ただ、そんなわたしでもまったく何もしなかったわけではなくて、たとえばコスモスの件は後から校長に尋ねてみたりもしたけれど、それは橋の絵のことを聞いたときの西野さんの反応によく似ていて、「は、コスモスですか？」といったような、何それ、といわんばかりのとぼけた返答しか得られなかった。また、いまのような事態を作り出した原因だと思われるあの電車の揺れをもう一度体験してみれば何かが変わるかもしれないと考え、同じ時刻の同じ車両に何度か乗ってみたけれど、少しずつ空間がぶれていくようなあの感覚を得られることは二度となかった。
そんななかわたしは、絵を描くのに集中することで、このどうにもならないくすぶりを

ごまかすようになった。
近頃では目の前の風景を訝しむことが多くて、そんなときはスマートフォンを取り出して何枚も写真を撮り、とりあえずすべて印刷したうえで気になったものから順番に模写する、ということを繰り返していた。
似たような場面を何枚描いたところで、何がちがっていて何がちがわないのかなんてわからないが、気になったら描かずにはいられなかった。わざわざもっと混乱するために絵を描いているようなものだとは自分でも気がついていたものの、わたしのかき乱された心は、それを上回る雑然とした状態でしか安心を得られないのだった。
「最近はずいぶんたくさんの絵を描いているね」
あぐらをかいた足の上にハルミチをのせて背中を撫でていた涼太くんがいった。彼の視線は、ローテーブルに投げ出されたいくつもの描きかけのスケッチブックに注がれている。
彼はいつものように午後の遅い時間に原付バイクでやって来て、ひとり掛けのソファに座って両膝を抱えながらスマートフォンのアプリでテトリスをやっていたかと思えば、ついさっきまではハルミチを追いかけ回して楽しんでいた。わたしはといえば、彼が何もいわないのをいいことにイーゼルの前に座ったまま絵を描き続けていた。
涼太くんは、何というか、えらく眠たげな顔立ちをしている。重たそうな一重まぶたが垂れ気味の目に覆い被さっていて、とろんとした表情を演出するのに一役買っている。全体的にぼんやりとした、薄い顔の造りだといえる。本人曰く、「そのおかげで割を食ったことはあっても、得したことなんて一度たりともありやしない」のだそうで、たしかに傍から見ても、その顔立ちのせいでほんとうに眠そうなときにも判別がつかず、たいへん不便なのだった。
そのときも、眠そうな顔で呑気なことをいうものだから、普段はその顔に愛着を感じているわたしもついむっとしてしまった。
「暇を持て余しているのよ」
つっけんどんに答えると、彼は、ぱっと何かを思い出したように明るい声を上げた。
「暇なんだって？　それはちょうどいいや」
まるで、暇であることが世にも素晴らしいことのような口ぶりだった。
「なにがちょうどいいの？」
「暇なやつを連れておいでっていわれてた写真展があるんだ」
「写真展？」
「ええっと」
たしかここに案内があったはず、と涼太くんは傍らに置いていたリュックを探ってくしゃくしゃになったチラシを取り出した。彼はいったんそれを腿の丸みに合わせて置き、てのひらでアイロンをかけるようにして、丁寧に皺を伸ばした。
「いままですっかり忘れてた。暇っていうフレーズでようやく思い出したよ」
彼は軽い調子でそういいながら、張りがなくなってぐにゃりとおじぎしているチラシをこちらに差し出してきた。わたしはいったん鉛筆を置いて、指先でそれを受け取った。
カメラを垂直に足もとへ向け、ひび割れたアスファルトの地面を容赦なく切り取った写真がメインに据えられたチラシの表には、右端の方に白抜きの素っ気ない文字で『日常の違和展』と書かれていた。
「むかしの友だちがカメラをやっていて、自費で展示会を開いたんだって」
「それって、わたしも知ってるひと？」
「千砂ちゃんには紹介したことはなかったと思う。というか、ぼく自身も、霧島とはあい

つが大学を出てすぐ上京してから一度も会ってなかったんだ。それが急にこのあいだ、うちの店にふらふらっと現れてチラシを置いていったんだよね。まあ、偶然だろうとは思うけど」

もう一度チラシを見てみると、隅の方に「写真：霧島純」とあった。わたしは、ふーんと気のないふりをしてみせたが、胸の内側では心臓がばくばくと異常なほどおおきく脈打つのを感じていた。『日常の違和展』だなんて、まるでわたしの気を引くためにつけられたみたいだ。まだ見ぬ主催者に「おいで」と呼びかけられているようだった。涼太くんが「行ってみる？」と聞いてきたので、動揺を隠しながらもはっきりとうなずいていた。

そして、その次の土曜日、わたしはひとりで写真展を訪れた。

涼太くんは土日に忙しくなる仕事をしているため、教職のわたしと休みが合致することはあまりない。月に数回あるかどうかというその日が、たまたまきょうだった。なのに今回めずらしく彼の方から、「ドウリョウケガノタメ、シゴトヤスメズ。アスイケヌ。ウメアワセ、イツカカナラズ」といった電報調の、まったくふざけているのか、それとも真面目に笑わせようとしてくれているのか、意図のわかりづらいメールがきのうの夜になって送られてきた。わたしはそれに対して「ナポレオン。ホールニテ」と、彼にしか理解できない暗号のような文言を送り返し、翌日を待ったのだった。

写真展の会場は、サンドウィッチに申し訳程度にはさまれた薄切りのトマトのように、両隣の建物に押しつぶされそうになってひっそりと建っている、くたびれた商業ビルの三階だった。

「くまざわビルヂング」という名称を確認し、狭い階段をのぼった。するとすぐ目の前に入り口があって、その開け放たれた扉のまん中に、涼太くんからもらったチラシと同じものが貼り付けてあった。

入場は無料だったので気兼ねなく入ることができた。さほど大きくはない正方形の部屋の四方の壁に、木製パネルに入った写真が一定の間隔をおいて規則正しく展示されていた。サイズは２Ｌ判か、大きくてもせいぜいＡ４判で、多く見積もっても三十から四十枚程度で、五十枚には届きそうにもなかった。左回りで順に見ていき、来場者がわたし以外にひとりだったこともあり、ゆっくり見たつもりだったけれど十五分ほどで一周することができた。

写真自体は、変哲のない、といっては涼太くんの友人に失礼かもしれないが、期待していたほどの驚愕や衝撃が写っているわけではなかった。路地裏に落ちたぼろぼろの洋書や、フェンスに空いた妙な形の穴、どこだか知らない建物の壁についたアメーバ状のしみなど、撮影者が「違和」を感じただろうものたちがピックアップされているのだが、それは、ことば通りの意味でちゃんと写真のなかに拾い上げられていることからしても、わたしの求めている違和とはちがうだろうということが直感でわかった。

がっかりしていると、ふと、肩越しに視線を感じた。思わず全身に緊張が走ったのは、この部屋にはわたしの他にはひとりしかいないのがわかっていたからだ。誰がこちらを見ているのかは明らかだった。わたしは、移動する振りをしながら、振り返ったことが相手にわからない程度にさりげなく、ゆっくりと、からだごと頭を動かした。

そのひとは、黒っぽい革ジャンに黒いズボンを身に着け、『橋の上の娘』のヴァネッサ・パラディみたいに髪を短くしていた。そのうえ室内にもかかわらず真っ黒のサングラスをしていたためにわかりにくかったけれど、肌の質感や葡萄酒色の口紅、胸のふくらみからすると、どうやら女性のようだった。彼女はわたしが入ってきたときにはすでにいたもうひとりの来場者で、いまは展示場のいちばん奥に立っており、わたしのいる入り口近くの場所とは、ちょうどこの部屋の対角線を結ぶ頂点同士という位置関係にあった。彼女は

たしかにこちらを向いていた。だが、距離があるうえにサングラス越しでは、その視線がわたしに合っているのかどうかは判断できなかった。
　相手はわたしが振り向いたのに気がついたのか、すっと顔をそむけた。でも、もしかしたら、ただわたしが立っている辺りの作品が気になっていて、たまたまこちらの方を向いていただけなのかもしれない。どういうわけか、わたしの内心は視線を感じたとき以上にそわそわしていた。顔をそむける直前に、彼女がにこりと笑ったような気がしたからかもしれない。
　せっかく来たのだから涼太くんの友人でもあるカメラマンの霧島純氏に会っておくべきだと思ったけれど、どこへ出掛けてしまったのか主催者が戻ってくる気配はいっこうになかった。サングラスの彼女とふたりきりで同じ空間にいることに気詰まりを感じはじめたわたしは、そのまま近くにあったドアをくぐり、逃げるように会場を後にした。
　その夜、涼太くんから電話があった。彼は急に約束をキャンセルしたことを謝ってから、写真展どうだった？　と聞いた。
「うん」とわたしは気のない返事をした。
「千砂ちゃんの趣味には合わなかった？」
「ううん、そんなことない」
「霧島には会えた？」
「会えなかった」
「えっそうだったの。連絡しておいたんだけどな」
「わたしが行ったときには会場にはいないみたいだった」
「何してたんだろ、あいつ」
「そのかわりヴァネッサに会ったよ」
「ヴァネッサ？」
「ヴァネッサ・パラディ」
「誰それ」
「知らない？　『橋の上の娘』」
「ルコントだ」
　イエス、と答えてわたしは黙った。
　涼太くんはこういうときの、つまり、気がそぞろなときのわたしの扱いには慣れていて、ヴァネッサについてそれ以上深掘りすることなく、あっさりと話をもとに戻した。
「会期が終わるまでに僕も行けるかな」
「チラシによると十月の一週めまでだそうよ」
「そりゃだめだ」
「残念。ああそうだ、それはそうと、ナポレオンよろしくね」
　わかったよ仕方ないな、と涼太くんはいった。それから彼は、このところ毎日のように挑戦しているという栗の茹で方についてひとしきりうんちくを披露し、わたしは、来月に行われる文化祭における学校の予算の不公平さについて散々愚痴をもらした。お互いの話にけりがつくと、どちらからともなく電話を切った。
　翌日の日曜日は朝からご飯を炊いて、和歌山の実家から送られてきた梅干しを具にしておにぎりを握った。母の梅干しはとくべつ酸っぱいが、おにぎりに入れるとちょうどよいあんばいに緩和される。小さめに握ったおにぎりをみっつと、塩だけで味つけした卵焼きを風呂敷で包み、それを鞄の底に入れて、わたしは図書館へと足を運んだ。
　からだの一部がない状態で生まれてくることがあるように、心がない状態で生まれてく

る人間もいるの？
西野さんの問いかけは、指先に巻いて何日も取り忘れた絆創膏のように、剥がしめの境がわからなくなるくらいわたしの心にぺたりとくっついて離れなかった。絆創膏の剥がし方、などという指南書なんて置いていないのはわかっていたけれど、もしかしたら、それに代わるものが見つかるかもしれないというわずかな期待はあった。
訪れたのは、電車を乗り継いで行くことのできる、県立の大きな図書館だった。こちらの取り留めのない要望から推定して相談係の司書が持ってきてくれたいくつかの書庫資料はどれも的確だった。彼女の了承を得てそれらを閲覧室へ持ち込み、大きな楕円形のテーブルに広げ、じっくりと噛みしめるように読んだ。
主に得られた点はふたつだった。
まずひとつめに押さえておかなければならないのは、心は脳が作り出したものだということだ。人間にはかならず脳がある。その脳が心を作ったのだとすれば、それは、心のない人間はいないという証明への前提条件だといえる（なかには脳を備えずに生まれてくる子もいるが、残念ながら脳をまったく持たずに成長することは難しいため、人間には脳があるとひとまず仮定する）。次に、心は他者とのコミュニケーションのなかで生まれたものではないか、という点。ここで大事なのは、自分に心があるということを相手に向けて証明するのはとても難しいのだけれど、にもかかわらず、人は目の前の相手には心があると仮定して接している、ということ。ひるがえせば、他者によってこちらにも心があると見なされていることになる。これは日々わたしたちが無意識におこなっている作業で、この知らず知らずの行動が、人間には心があるということを証明する大きな材料になるように思われた。
前屈みになっていたからだを起こして腕の時計を確認すると、いつのまにか二時間が経過していた。短時間のにわか勉強で得られたこれらの知識には満足したような、そうでもないような、むずがゆさが残った。消化不良のまま、気を紛らわせるために中庭に出た。片隅のベンチに座り、持参したおにぎりを食べながら芝生に散った落葉を眺めた。
出会って間もない頃、涼太くんが「子どもの頃の夢は缶詰工場で働くことだった」といったことがあった。どこかの河川敷を並んで歩いていて、もみじがはらはらと風に舞っていた。
「落葉の缶詰が欲しいと思ったんだ」
彼の少年時代を想像して、思わず口もとがゆるんだ。
「缶に詰めて遊んでたのね」
「うん。でも、空いた缶に押し込むだけじゃ完全な缶詰じゃないだろ。蓋が閉まってないんだから。だから缶詰工場で働いて、落葉の缶詰を作りたいと思ってた」
「その工場ではほかにはどんな缶詰を作っているの？」
「いろいろさ。ビー玉の缶詰とか、貝殻の缶詰とか。宝石の缶詰だってある。お客様の要望に答えて、どんな缶詰だって作る工場さ」
「いいね、なんか」
缶詰工場を夢見る少年だった涼太くんを、眩しく思ったことを覚えている。
中庭のベンチはちょうど建物の陰になっており、微風が肌に気持ちよかった。心の風通しをよくしようと、ぎゅっと目をつぶった。
わたしには、ちょっと突飛な発想かもしれないけれど、この世界はいくぶん整いすぎているんじゃないか、という思いがあった。世界とは、もちろん自分が目にすることのできる狭い範囲のことにすぎないが、そのように定義してみたわたしのちっぽけな世界は、浮き沈みがない分隙もなく、いささか端正すぎるように思われて仕方がなかった。それが悪

いというわけではないが、どうしようもなく味気なく感じることが、しばしばあった。
いわば自分の人生は、「わたし」という缶詰に入れられてあらかじめ用意された既製品なのかもしれない、というようなひねくれた考えが根底にあったように思う。
高校で教鞭をとっている父と、子ども向けの絵画教室を長年主催している母の、両方の特性をちょうど半分ずつ取り入れたかのような中学校の美術教師の職に就いて七年半が経つけれど、いろいろなことをうまくやり過ごしてきたなという実感はあっても、何ものにも代えがたいような充足感を覚えたことはただの一度もなかった。
これまでわたしは、それなりの波はあったにせよ、家族や友人たちに囲まれたおおむね幸せだったといえる幼少期を過ごし、偶然にも歯車がうまくかみ合っていたのか、その後も大した挫折を経験するでもなくそのままうっかり大人になってしまった。掛合校長のことばを借りれば「運がいい」ということなのかもしれないが、両親との不仲や大きな失恋などというありふれた絶望に遭遇しなかったことは、あまりにも予定調和な人生のような気がして、神様の作為さえ感じられたほどだ。そのおかげでわたしは薄っぺらい人間になってしまったのではないだろうか。
そういう思いがあったから、西野さんの問いかけに安易に答えることをためらったのだ。
「わたしの人生は缶詰のようなものかもしれない」
いつだったか、そんな風に涼太くんに打ち明けてみたことがあった。もちろんわたしの頭には、彼が話してくれた缶詰工場が浮かんでいた。
「残念だけど」涼太くんの答えはにべもなかった。「うちの工場では、誰かの人生は扱ってないんだ。なんてったって人生ってのは生ものだからね。生ものは缶には詰められないんだよ」
残念だけど、と彼は繰り返した。
「缶詰だ、とは断定してないでしょ」わたしは何とかわかってもらおうと食い下がった。「缶詰のようなもの、っていったのよ。それに生ものに見えても、実は神様が書いた譜面をなぞってるだけなのかもしれないのよ、人生って」
すると、彼はあくびをかみころしたような顔で「贅沢だなあ」というのだった。
「もしかしたら、ひとによっては千砂ちゃんと同じような人生を過ごしても幸せじゃなかったって思うかもしれないわけで、きみは誰よりも現状を前向きに捉えることのできる優れた才能の持ち主なのかもしれないんだよ」
彼にしてみれば、おおむね幸せに生きてきたことをつまらないと嘆くのは贅沢だということなのだろう。けれどわたしには、むしろそのことが不幸だったんじゃないかとさえ思えるのだった。
なかば本気で思うのは、わたしが違和を感じるようになったのは、これまでの人生があまりにも平凡すぎたためで、もしかしたらそれに気づいた神様による軌道修正が行われているのかもしれない、ということだった。
近ごろでは、日が経つにつれむしろそうあるべき世界に戻ってきたような、あべこべの感覚がわたしのなかに生まれ出していた。これをうまく説明するのはとてもむずかしいのだけれど、やっとこの世界にぴったりと自分を当てはめられるのかもしれないといったような、喜びとまではいわないまでも、どちらかといえばほっとしたような、安堵の気もちがわたしのうちを占拠しはじめているのだった。
そんな感覚を持つのはおかしいというのは理解していたが、湧き出てくる感情を止めることはできなかった。混乱のさなかにいると、それが大きく不自然であることに気がついていても、改善する方法を見つけられないみたいだった。

どうやらこのままでは、自分が向かわされている場所にちゃんとふさわしい靴を履いているのかどうかさえわからない状態のまま、歩き続けるしかないのかもしれなかった。
おにぎりを食べ終えてからまた図書館に戻り、煮詰まったジャムのように脳みそが焦げついてしまわないよう、木べらでかき回すかのごとく他の本を物色することにした。
海外文学の棚のおすすめのコーナーにボルヘスの『伝奇集』が置かれていたので手に取ってみた。ずいぶん前に『バベルの図書館』を読んだことがあったけれど、難解だったことしか覚えていない。立ったまま再読してみたが、この短編は短いことが特徴であるにもかかわらず、その内容を理解するためにはこれについて書かれたものすごく膨大な量の書物が同時に必要であるという矛盾をはらんでいる、ということくらいしかわからなかった。

わたしは『伝奇集』を棚に戻し、そのとなりにあったパトリック・モディアノの『暗いブティック通り』を手に取り、それから、ブラウン神父シリーズの未読の作品があったのを思い出したので、探し出してその二冊を借りて帰った。ありがたいことに、返却は最寄りの図書館でもいいとのことだった。
その日の夕方、涼太くんがナポレオンを抱えてやって来た。原付バイクの前かごにのせてきたものだから、箱のなかでバランスを崩し、いちごや生クリームが散乱していた。
「ちゃんと手で持ってこなきゃ」
わたしはテーブルに置いた箱を覗き込みながら文句をいった。
「バイクは片手では運転できないよ」
そういって、涼太くんも横から覗き込んできた。
「だったら自転車で来ればいいじゃない」
「無茶いうなよ。ここまで十キロ近くあるんだよ」
「そんなに遠い？」
「遠いよ」
「じゃあ、今度わたしが自転車で涼太くんちに行ってみる」
「やめた方がいいと思うけど」
「疲れたら、帰りはバイクで送ってよ」
「自転車はどうするのさ？」
「それはまたその次の機会にそっちが乗ってきてよ」
「その帰りはどうなるのさ？」
「歩いて帰る？」
涼太くんは大げさに肩をすくめて、箱から顔を上げた。
わたしは戸棚から小さめのお皿を二枚とフォークを二本取り出した。そのあいだに上着を脱ぎながら部屋つづきのリビングへ移動した涼太くんは、テレビの脇に立て掛けてあったふわふわのハンディモップを取り上げたかと思うと、ソファに寝そべっているハルミチの毛をひとなでし、慌てて逃げ出した相手を見て大笑いしていた。
「ちょっと、なにしてるの」
「ハルミチ、毛が逆立ってた。おもしろい」
わたしはため息をついて、まな板に移した、半分潰れたホールのケーキを切り分けながら「ほんと、ハルミチがお気に入りなんだから」と呟いた。
涼太くんはハンディモップを元に戻すと、脱いだ上着をソファに掛けてからこちらに戻って、わたしの足もとに逃げてきていたハルミチをひょいと抱え上げた。なんだかんだいってハルミチの方でも彼に懐いているのだ。涼太くんはにらめっこをするみたいに寄り目でハルミチの鼻のあたりを見つめながら、「まあね」といった。どうやらわたしの呟きが

聞こえていたらしい。
「わたしとハルミチの両方が溺れてたら、どっちを助ける？」
わざといじわるな質問を投げかけてみた。
「定番の難問だね」
彼はちらりとこちらを見て、またハルミチに視線を戻してから、唇をすぼめて変な顔をしてみせた。
「即刻答えて」
「ハルミチを助ける」
「あ、そ」
「だってハルミチが死んだら千砂ちゃんが泣くだろ？　きみの悲しい顔は見たくないさ」
「言い訳だね。死んだ顔なら見られるっての」
「もしきみが死んだら、ハルミチを岸に上げて僕も海に入るさ」
「そういうのはやさしさとはいわないよ」
「そうかなあ」
涼太くんは首をかしげながら、僕と千砂ちゃんとハルミチがいて、誰が生き残るかっていうならハルミチだろうと思うなあといった。それって問題をすり替えてるだけじゃないのと思ったけれど、それ以上は反論せずにおいた。どうせ涼太くんはわたしを大事に思ってくれているし、ひがんでいるのはわたしの方なのだ。そんなことはとてもよくわかっているくせに、自分にとって最善の答えばかりを求めてしまうことが悔しかった。
それからわたしが珈琲を淹れ、テーブルについてふたりでナポレオンを食べた。
ナポレオンは涼太くんが作ったものだ。缶詰工場に憧れた少年は、いまやケーキ職人になって、サイフォン珈琲を出す喫茶店で働いている。軽食しか出さない喫茶店にしては不相応なくらいに本格的なオーブンがあるらしく、仕込みから焼き上げまですべてを彼が担っているそうだ。
涼太くんは普段から味見で嫌というほど自分のケーキを食べているだろうけれど、わたしが切り分けたナポレオンを文句もいわずに食べた。
「お店で余分に焼いて持ってきてくれたの？」
「ホールニテ」とメールを送ったからとはいえ、ほんとうにまるごと持ってきてくれるとは思わなかった。
「いや」彼はいったんフォークを置いて、トレーナーの前についているポケットに両手をすっと差し入れた。「実はきのうの夜、家で作ったんだ」
「えっそうだったの」
たまに余ったケーキを携えてやって来ることがあったので、そのつもりでいってみたことだった。まさか作ってきてくれるとは。
「ナポレオンはね、いつだって人気ナンバーワンの座を争っているんだ。余らないよ」
「わざわざ作ってくれたんだ。悪かったね」
そういいながら、わたしは彼の前に置いた珈琲のカップに目が釘付けになっていた。
涼太くんは珈琲にはかならず砂糖とミルクを入れる。「苦いものと辛いものと酸っぱいものが嫌い」と、だったら甘いものしか食べられないじゃないかという突っ込みを入れたくなるくらい偏食な彼が、珈琲に何も入れずに飲むところなんて見たことがない。旅先で入った定食屋で出てきた緑茶が、蒸らしすぎたのかとても苦く、テーブルに置いてあった砂糖壷を開けようとしていたので慌てて止めたくらいだ。そんな彼が、珈琲をブラックのまま飲んでいる。
信じられない思いで、彼がもう一度カップを持ち上げるのを待った。ナポレオンに気を

取られていたせいで気がつかなかったけれど、涼太くんは猫舌だから、まだ珈琲に口をつけていないだけかもしれない。中身は減っているように見えるが、わたしがうっかり少なめに入れてしまっただけかもしれない。わたしは、さりげなく、じっと観察した。

小さい頃からの癖なんだといって、彼はいつも、中身が冷めるまでのあいだはまるでスープでも飲むかのようにスプーンでその不透明な液体をすくって口に入れる。行儀が悪いなあといくら注意しても直そうとはしない、愛すべき癖だった。それには砂糖とミルクをかき混ぜたあとのスプーンを使うのだが、わざわざ彼の前に用意した角砂糖の小皿もあたためたミルクの入ったピッチャーも、そしてスプーンにも、手を付けることなく涼太くんは珈琲を飲んだ。まるでそれらははじめからそこにないもののようだった。

「ねえ涼太くん」わたしは自分も珈琲をひとくち飲んで、心を落ち着かせた。「ナポレオン、とてもおいしかった。ありがとね」

「残ったものは、なるべくお早めにお召し上がり下さい」と彼は笑った。

『日常の違和展』をふたたび訪れた理由は自分でもよくわからなかった。

会期が明日までに迫っていると思うと、何か大事なことを見落としているような気がしてならなかったのだ。いや、そんな風に考えることによってもう一度ここに来る言い訳を探していたような気もする。その理由は、やっぱりよくわからない。でも、ただひとつ、霧島氏に会えなかったことが心残りだったのは間違いない。彼に会って、どうしてこのタイトルにしたのか、ということくらいは聞き出せたらいいなと思っていた。

ところが、残念ながらきょうも主催者らしき人物は見当たらなかった。当初は涼太くんに霧島氏の風貌について聞いてこなかったことを悔やんだが、どう見てもこの場を仕切っているような雰囲気のひとはいなかった。だが、偶然とはすごいもので、数人の来場者に交じって展示を眺めるヴァネッサの姿を見つけた。彼女はきょうも全身を黒い服装で包んでおり、濃い色のサングラスをしていた。

物干し竿に洗濯バサミで止められた紐靴を、空を背景にして低いアングルから撮られた写真の前で立ち止まっていると、ヴァネッサがゆっくりとした足取りでこちらに近づいてくるのがわかった。目の端に、ほかにふたりいたカップルらしい来場者が会場を出ていくのが映った。また、彼女とふたりきりになってしまった。不自然にならないようこちらも歩き出すべきか、彼女が行き過ぎるまで待つべきか、とっさに迷った。どうしてこれほどまでに意識してしまうのかわからなかったけれど、わたしの頭のなかには、このあいだ彼女が顔をそむける間際に見せた、かすかな笑みがちらついていた。

「こんにちは」

すれ違い様にヴァネッサがいった。まるで散歩の途中ですれ違った相手にかけるような挨拶だった。

まさかヴァネッサに声をかけられるとは思ってもおらず、驚いて亀のように首をすくめた。振りかえると、ちょうどわたしの後ろに彼女は立ち止まっていた。その口もとに浮かぶ笑みが、先日見せた笑みと重なって、失礼だと思う余裕もなく相手の顔に見入ってしまった。何よりも、その見た目から女性だとばかり思っていたのに、声を聞いたところもしかしたら男性かもしれないという印象を受け、よりいっそう戸惑ったのだった。

そんな相手から、「あなた藤井千砂さん？」と自分の名前が出てきたことで、さらにびっくりした。その声は、やはりハスキーな女性の声というよりも、男性が意識して高い声を出しているような感じがした。

「いきなりごめんなさい」わたしがことばを失っていると、相手は口もとを綻ばせて説明を加えた。「わたし、霧島純です。町田から、あなたが来るって聞いていたので」

相手が写真展の主催者だと名乗ったことでさらに混乱しているわたしに向かって、ヴァネッサはポケットから取り出したスマートフォンの画面を差し出した。それはどうやら涼太くんとのやりとりのようで、「この子がひとりで行くのでくれぐれもよろしく」というメッセージとともに、いつのまに撮ったのかピンボケしたわたしの写真が添付されていた。

「このあいだも来てくれたわよね？　気がついたんだけど、あなたがすぐに出ていってしまったから挨拶できなかったの、ごめんなさい」

「あなたが霧島さん……？」

「ええ。町田涼太の元男ともだちの、いまは女ともだち」

「はあ」

「町田にも会いたかったけれど、それはどうでもいいの。むしろ、あなたに会いたかったから。だから、また来てくれてうれしい。町田の職場はわかってるから、いつだって会いに行けるしね。ああ、もちろん変な意味ではないわよ。安心して、わたしこう見えても、ちゃんと恋人いるのよ」

涼太くんからは何も聞かされていなかったけれど、男ともだちがいまは女ともだちになっていることについて、彼は果たして気がついているだろうか。霧島さんはチラシを持って涼太くんの店に行ったらしいけれど、そのときの服装によっては気がつかない可能性もないとはいえない。その可能性を追求したくなるくらい、涼太くんというひとはぼんやりしているのだ。

「あの……、」わたしはすこし言い淀んでから、思い切って尋ねてみた。「どうしてわたしに会いたかったんですか？」

「千砂ちゃん、町田と同い年よね？」

「ええ、はいそうですけど……？」

「だったらわたしとも同い年だから、敬語使わなくてもいいよ」

「ああ……、ええ」

「どうしてあなたに会いたかったかっていうとね、それにはドラマチックな理由とそうでもない理由とがあるけれど、どっちの方が聞きたい？」

「は？」

「わたしはドラマチックな理由の方を話したいけど、そうするとあなたを傷つけるかもしれない。そうでもない方は誰も傷つかないけど面白味に欠ける」

「ドラマチックな方が、いいです」

「わかったわ」霧島さんは右手の腕時計をちらっと見た。「じゃあきょうはもう終わりにしましょう」

「えっ？」

チラシによると展示会は五時までだったはずだ。閉めるにはまだ二時間以上早い。わたしが戸惑っているうちに霧島さんはすたすたと奥へ歩いていき、隅の方に置いてあった黒い鞄をひょいと肩にかけると、鍵を取り出しながらこちらに戻ってきた。

「どうせ、このあとはもう誰も来ないわよ。きのうもおとついもそうだったから、きょうもきっとそう。さあ、行きましょ」

あっけらかんとそんなことをいって、さっさと部屋を出ていこうとするので慌てて追いかけるしかなかった。

霧島さんはほとんど膝を折らずに大股で歩き、滑るように階段を下りていった。その後を置いていかれないよう小走りで付いていく。ビルを出たと思ったらすぐにまたとなりのビルに入ったので虚をつかれたが、どうやら二階にある喫茶店が目的だったようだ。

「それで、なにを聞きたいの？」
薄暗い店の、ステンドグラス風の笠で覆われた白熱ランプの置いてあるテーブル席に落ち着いて、珈琲をふたつ注文したところで、霧島さんがまるでこちらを促すようにそういった。
「わたしに会いたかったドラマチックな理由、だったと思いますけど」
首をかしげながら答えると、霧島さんは、相変わらずサングラスをかけたままなので表情はわかりにくかったものの、くすりと笑った。
「そんなのここへ連れてくる口実に決まってるじゃないの。なにか聞きたいことがありそうだったもの。ね、なに、なに？」
「えっ、え？」
「どうしてわたしに会いたかったんですか、って聞いたわよね、あなたさっき」
「はい」
「もちろん声の調子とか、表情とか、そういったことも含めたうえで感じたことなんだけど、そう尋ねるってことはあなたの方こそわたしに会いたかったのかなって、そう思ったのよ」
どきりとした。そして、そのあとに霧島さんが続けたせりふはさらにわたしをびっくりさせた。
「あなたが興味を持ったのはわたしの写真ではなくて、そのテーマだったりして。『日常の違和展』」
答えあぐねていると、霧島さんはふっと口もとを綻ばせた。
「鎌をかけてみたつもりだけど、残念。こちらに人の心を読む能力がないせいで、よくわからない。でもね、わたし、勘だけはするどいのよ。やっぱりあなたはわたしとおなじだって思えてならない。この世のはざまに落ち込んでしまった、このわたしと」
「この世のはざまに……？」
「そ」
霧島さんは、運ばれてきた珈琲をひとくち飲むとカップをテーブルに戻し、ほの暗い照明のもとではなおさら、その珈琲の入った容れ物と見まがうように滑らかな、陶器みたいな指をゆるく組み合わせるようにして、そのままカップに添えた。それから、顔をじっとこちらに固定した。明るくない場所にいるのにサングラスをかけているから、きっと彼女の瞳孔は真夜中に目が覚めたときのように丸く開いているのだろうな、と思った。サングラス越しでも、相手がそう意識しているのであれば、こちらに視線が向けられていることがわかるのだとはじめて知った。わたしは彼女の視線をうまく受け止められず、赤葡萄酒のような、深い色の口紅が塗られた薄くうつくしい唇に見入った。
「それはもしかしたら、はざま、ではないのかもしれない」
わたしは、彼女が話を続けることをふしぎに思った。きっと霧島さんは、これからわたしに、すこしくらいは長くて、けれどもすごく重要な話をしてくれるのだという予感がした。どうしてわたしに語ろうとするのか、話の内容よりもむしろその理由の方が知りたい気がした。
「もうひとつの世界、というのがほんとうはぴったりなんだけど、大げさに聞こえる感じがすきではないの」
霧島さんが何のことをいっているのかよくわかる気がしたので、わたしは、はいと小さくうなずいて同意を示した。すると彼女は体を乗り出して、「でしょう？」と嬉しそうにいって、先を続けた。
「一年くらい前だったかな。それは突然のことだった。わたしはいつものようにカメラを

抱えて旅に出た。荷物はほとんど持たないの。わたし、カメラより重たいものは持ちたくないのよ。これは冗談ではなく、ほんとのことよ。いまの世のなか、少なくとも日本にいればたいてのものは現地で調達できるんだもの、荷物なんて必要ないのよ。わたしは普段、何にだってカメラを向けるわけではない。撮りたいものを吟味して、これだと思うものにレンズを向ける。ファインダーをのぞいて、四角く切り出された世界が、その小さな世界が、これ以上ないくらいに完璧なものになった瞬間にシャッターを切る。わたしはよくフィルムカメラを使うんだけど、その瞬間はまさに『フィルムに焼き付ける』ということばがぴったりなの。風景をフィルムに押しつけて型を取っているような、そんな感覚がある。そして、そうやって完璧なものを取り出したときにはいつだって、惚けたように茫然としてしまうんだ。けどね、そう、あのときはファインダーから目を外した途端にね、おかしさを感じたの。あれ、何かがちがう。でも何がちがうのかがわからない。だけど、さっきまでわたしが立っていた世界と、いまわたしがいる世界ではあきらかに何かがちがってしまっている。それは目で捉えられるはずのはっきりとした何かであるだろうという気がしているのに、どうしてもつかまえることができなかった。わたしはね、きっとそのとき、ファインダーをのぞく前と後でちがう世界に来てしまったのだと思っているの。そして、それをこの世のはざまに落ち込んでしまったと表現しているというわけ。とはいえまあこんなこと誰にも話せないから、あくまでも自分の心のなかでってことだけれどね」

話を終えた霧島さんは、ふっと笑ったつもりだったのかもしれないけれど、頬を歪めたときの動きが妙に不自然に見えた。もしかすると、話をしてすっきりしたというよりは、むしろもっと重い荷物を背負ってしまったと感じているのかもしれない。

「どうして」声を出してみてはじめて喉がからからに渇いていることに気がつき、ひとまず水を一杯飲んでから続けた。「誰にも話せないといったのに、どうして、その話をわたしにしたんですか？」

やっぱりそのことがいちばん知りたかった。

「どうして？」霧島さんはとても意外そうにわたしのことばを繰り返した。「だって、それはあなたがわたしの話を必要としていたから。わたしにはそう見えたからよ」

「だって、どうしてそんなことがあなたにわかるの？　あなたは占い師か何かなの？」

「そんなことわたしに聞かれたって知らないわ。何となく、ぴんときた。あなたにこの話をするべきだって。それにあなただって同じなわけでしょう？　何となくぴんときたから、この写真展に来たんでしょう？」

たしかにそうだった。展示会のタイトルに惹かれたというのが大きな理由ではあるが、それを「ぴんときた」と表現しても差し障りはないだろう。わたしは、生徒たちが時折そんな風にやるのを思い出しながら、相手に促されるままに素直にこくんとうなずいた。

「あなたも同じなんじゃないかって、わたしは思ってる。いえ、そう願ってる」と彼女はいった。

「はい」とわたしはもう一度、うなずいた。それだけでじゅうぶんだというように、霧島さんもうなずいた。

それから、わたしたちはお互いの状況やそれについての考えなどを交換し合った。彼女は、この状況を自分がどんな風に理解しているのかをすらすらと説明してくれた。

我々が入り込んだのは、空間的に異質な世界ではあるかもしれないけれどそれは時間的に歪められたものではない、と霧島さんはいった。つまり、同じ時間軸を共有するふたつの空間があって、その一方の世界からもう一方の世界に、まるで回転中のメリーゴーラウンドで難なくとなりの馬に乗り換えるように、ふっと飛び移ってしまったのかもしれない、ということだった。まあメリーゴーラウンドとちがうのは本人の意思で飛び移ったわけ

ではないということだけどね、と彼女は笑いながらつけ加えた。
「千砂ちゃんはどんなことにおかしさを感じたことがある？」
霧島さんは、わたしがこれまで「違和」や「異変」と表現してきたもののことを「おかしさ」といっているようだ。そのことばは、綿菓子や氷菓子のようなものを連想させる、甘くてやさしい表現だと思った。
「涼太くんがわたしの嫌いなものを知らなかったり」
「ねえ、それってすごく怒った？」
「いえ、怒りというよりもまず違和を感じた。そのときに、おかしさを感じたんです」
「それはすごく大事なことだと思う。あなたは、自分の心や記憶をきちんと信用できているからこそおかしさを感じたわけだもの」
「そうなんでしょうか」
「そうよ。わたしもね、はじめにおかしいと思ったのは恋人の言動。わたしに向かって、たまにはヒールの靴でも履いたら、なんていうの。わたしがヒールのある靴なんて絶対に履かないことくらいとっくに知っているはずなのに。こんなにおかしなこと、ないのよ」
「霧島さんは自分の心や記憶を信用しているんですね」
「当然よ。でもね、だからこそ不安になった。千砂ちゃんあなたもきっと感じたような底知れぬ不安を、わたしも感じたの。自分だけがどこかの谷間にでも落ち込んでしまったかのような不安。見せかけはまったく変わらないのに何かがまったくちがってしまった世界にいる、とんでもない違和感。わたしはこれを払拭するために、うわべの違和を探してまわった。そして写真を撮った。それで何が解決するって思ったわけではないけれど、少なくともわたしが欲している答えへの道筋くらいは見つかるかもしれないと思ったの。残念ながらまだ見つかってはいないけれどね。その代わり写真展を開けるくらいの作品が溜まったから、やってみたの。もしかしたら同じ立場のひとがほかにもいて、そういうひとが見に来てくれるかもしれない、なんてことは考えなかったわけじゃないけれど、ほとんど考えなかったわ。頭の隅の隅の片隅くらいにはあったけどね」
ついでに垂らした釣り糸にほいほいと絡まってきたのがわたしだということだろうか。でも、それはやっぱり霧島さんが慧眼だったのだろうと思う。何というか、霧島さんには、占い師みたいに未来を見据える力がほんとうに備わっているのかもしれないと思わせるような、どこか超然とした、ふしぎな雰囲気があった。
「わたしね、実はとても腹立たしいの」と霧島さんはいった。
「腹立たしい？」わたしは首をかしげた。
「正直にいうと、怒ってる」
「なにに？」
「この状況によ、もちろん」
霧島さんは強くそういって、一度ことばを切った。サングラスの向こうで眉をしかめたのがわかった。彼女は続けた。
「どうしてわたしがこんな目に遭わなきゃいけないのっていつも思う。あなたは腹が立ったりしない？」
「そうね……、」すこし考えてから、首を横に振った。「あんまり腹は立たないかな。じたばたしても仕方がないって思ってるのかもしれない」
「千砂ちゃんはすごいのね。わたしは、だめね。いつだって何にだって腹を立ててる。腹が立って腹が立って仕方がない。こんな姿に生まれついたのも、ほんとうにやりたかったことができなかったのも、みんな腹立たしい。挙げ句にこんな状況に放り出されて。なんでわたしばっかりって思うと悔しくて。どうやったって怒りがおさまらないのよ」

わたしには、霧島さんがまとっているのは静謐で穏やかな空気のように感じられ、口でいうほど怒っているようには見えなかった。
「でもね、きょうはうれしく思っているのよ」霧島さんはテーブルに両肘をのせ、組んだ指に顎を置いた。そして、一転して明るい声でいった。「千砂ちゃんと話ができたから」
「わたしもよ」
「実をいうとね、あなたにこの話をすることはあらかじめ決めてあったの。あなたがわたしと同じかもしれないなんて期待してたわけじゃない。ただ、もしもあなたに会えたら、あなたが展示会に来てくれたら、わたしの事情を打ち明けようって最初からそう思っていたのよ」
「……、どうして？」
「うーん。誰かに聞いてほしかったっていうのが、本音だけど……。自分でもよくわからないのよ。恋人にはどうしてもこの話はできない。でも、町田の彼女になら、話せるかなって思った。何でだろう？　これも、勘ね。ぴんときたのよ」
「それで、たまたまわたしがあなたと同じだった？」
「我ながら出来すぎてると思う。だから信じてくれなくてもいいんだけど、ただ、わたしはこう思ってる。あんまりにもわたしが怒ってるもんだから、お天道様が、わたしのところに千砂ちゃんを運んできてくれた」
「お天道様って神様のこと？」
「そうよ。うちのおばあちゃんがよくいってた。何かあったらお天道様に感謝しなさいって。わたしの育ての親なの」
「へえ」
思わず頬がゆるんだ。霧島さんはきっとおばあちゃん似なんだろうと思った。
霧島さんはあらかじめわたしにこの話をしようと決めていたというけれど、わたしには、やっぱりある程度未来を予想していたんじゃないかと思えてならなかった。はじめからぴんときていて、わたしに会う前から会うべきだと感じていたんじゃないだろうか。
「ねえ千砂ちゃん、また今度お互いに感じたおかしさを教えあいっこしましょうね」
彼女はそういって締めくくった。そんなかわいらしいことをいうくせに最後までサングラスを外そうともしないところが、霧島さんのつかみどころのないふしぎな雰囲気をいっそう際立たせていた。
喫茶店を出て、町田によろしくといって手を振る霧島さんとビルの前で別れた。彼女はまた展示室のあるとなりの建物に戻っていった。
その日、夕食を食べてから頃合いを見計らって涼太くんに電話をしてみたが、まだ仕事中なのか出なかった。お風呂のあと、冷蔵庫をのぞいて、このあいだナポレオンといっしょに彼が持ってきたシークァーサー酎ハイを取り出した。とてもおいしかったが、それが間違いなくシークァーサーの味なのかどうかはわからなかった。酎ハイの缶をひとまずテーブルに置いて、髪をタオルで拭きながらイーゼルの前に腰掛けた。片足を折り曲げて椅子に置き、同じ側の腕でそれを抱えた。イーゼルには描きかけのスケッチが立て掛けてある。それを眺めながら、霧島さんとの出会いはわたしにとってどういう意味があるのだろうと考えた。
彼女との出会いはわたしを勇気づけたし、ひとりじゃなかったんだという安心も与えてくれた。こんな身近に同じ境遇の人間がふたりもいたということは、世のなかには、何かおかしいなと首をひねりながらもとりあえず普通に暮らしているひとが思いのほかたくさんいるのかもしれない、とも思えた。
そして、何より喜ばしかったのは、この状況が気のせいではないとはっきりしたことだ

った。自分の頭の具合がおかしいのだと思わずに済むことは、長い混乱から抜け出すきっかけになるかもしれないという希望を生んだ。
だが一方で、腹立たしいのと感情を露にした霧島さんを、ちょっと離れたところで眺めている自分がいることも事実だった。川のこちら側に取り残された者同士であるはずなのに、同じ岸辺を分けあっているはずなのに、立っている場所は上流と下流くらいちがうように思えた。それは、この状況をはっきりと否定した彼女と、拒否するべきか受け入れるべきかふらふらと迷い続けているわたしとの、ちがいによるものかもしれなかった。
それに、たとえ霧島さんの話を聞いて混乱から逃れられたのだとしても、この先どうすればいいのかという大きな疑問に答えが出ることはないような気もした。
電話のベルが鳴ったのは真夜中過ぎだった。もうすでに眠りについていたけれど、涼太くんだと思ったので手を伸ばして枕もとのスマートフォンを取り上げた。出てみるとやっぱり彼で、遅い時間に電話したことをまず謝った。ついさっき着信に気づいたのだという。わたしは構わないと答えた。
「明日にしようかと思ったんだけど、もしかしたらまだ起きてるかなって思って」
「寝てたよ」
「ごめん」
「いいの。あのね、きょう、もう一度『日常の違和展』に行ってみたの」
「そうなんだ。そんなに気に入ったの。おもしろかった？」
「おもしろかったよ。おかしさもあって。霧島さんにも会えた」
「そうかよかった。霧島って、ちょっと変わってるでしょ」
「うん、すごく変わってた。涼太くんもびっくりするくらい」
「べつに僕はびっくりしないよ。あいつが変わってるのはもとから知ってるし。でもあいつすごく頭がいいんだよ。勉強ができるっていうだけじゃなくて、鋭いっていうか、先を見通す力があるっていうか」
「すごい。涼太くん、霧島さんのことよくわかってる」
「そりゃあね、大学時代はよくいっしょにいたし」
「なのに本質は何もわかってないのね」
「本質？　なにそれ」
まあいいわ、とわたしはいった。眠そうな声を出したからか、涼太くんはおやすみといって会話を終わらせた。わたしはそのまま眠りに引き込まれていった。遠くでツーツーという音がした。夢は見なかった。

霧島さんはわたしに広く深く影響を与えた。
わたしは彼女の真似をして写真を撮るようになった。これまでもスマートフォンでは撮っていたけれど、わざわざ箪笥の引き出しの奥から、しまい込んで忘れていたデジタルカメラを引っ張りだしてきた。
カメラより重いものは持ちたくないの、といった霧島さんのせりふを苦笑とともに思い出しながら、自分もカメラだけを肩から提げて外へ出て、家の周辺や、ときには電車に乗って遠出をしてまで、目につくものを手当り次第に撮影していった。
夢中になって画面をのぞいているときは、小さく切り取られた四角のなかに世界が凝縮されているような気がしたし、また、ここぞという場面でシャッターを切ると、その限定された空間に何かとくべつなものを閉じ込めたのだと確信するのだけれど、印刷した写真を見てみると、まるで手品師がぱちんと指を鳴らしてあるべきものを消し去ったかのように、「何か」は失われてしまっているのだった。幾枚もの写真を床いっぱいに並べてみて

も、求めるものはどこにも写っていなかった。
日々は多少の焦りとともに過ぎていった。
焦燥をぶつけるように撮った写真を模写し続けた。この頃では、金柑の絵は放っておいて学校でも模写をしている。いつしか放課後に美術室へ一番乗りすることが日課になっていた。クラブの生徒たちが集まってくる前のしずかな時間が、絵を描くのに最適だったからだ。
ひとりふたりと部員がやって来ると、喧噪が教室じゅうに反響しはじめる。わたしはいったん鉛筆を置いて室内を見回した。ほとんどの部員が揃っているようだったが、まじめに活動をはじめている生徒は誰もいない。ため息をついてもう一度鉛筆を手にした。けれど、騒がしさが気になって、集中できない。
「あなたたち、さっさと活動をはじめなさい」
立ち上がって通り一遍に注意をし、わたしはまたイーゼルに向かった。
美術部には素直な子たちが多いので、こちらがそうやって促せば、しぶしぶではあってもちゃんと活動をはじめる。そのなかには西野さんもいた。彼女は教室の後ろの方で、友人たちと作業台を共有し、製作中の絵に取りかかりはじめたようだ。実をいうと、わたしは彼女のことが気に掛かっていた。
ここ何日か、美術部で顔を合わせても話しかけてこなくなったし、何だかとっつきにくくなった。向こうから声をかけてきてくれれば心について調べたことを話せるのに、と思うと歯がゆかった。
けれども、もし西野さん本人に何らかの変化が起こっているのだとしたら。心について問いかけてきた西野さんと、いまの西野さんでは何かがちがってしまっているのだとしたら。わたしは、彼女に対して教師としての責任を果たす機会を、永遠に失ってしまうことになるのだろうか。
模写はどんどん溜まっていった。わたしの部屋を訪れた涼太くんは、床に散らばる大量のクロッキー用紙を見て、「おわっ」とのけぞった。
「美術教師から画家に転向したの？」
冗談めかして尋ねてくる彼に、わたしはいらない紙をさっとかき集めてゴミ箱に放り込みながら、済ました顔でうなずいてみせた。
「そうよ」
「ほんとう？　先生辞めちゃうの？」
「嘘だよ。でも、迷ってる。このまま続けていいのかどうか」
ふーんと呟いて、涼太くんはイーゼルの前の丸椅子に腰掛け、背負っていた薄いリュックを前にまわして組んだ足のうえに置いた。指定席を取られてしまったわたしは、仕方なくソファの隅で丸くなっていたハルミチの横に無理やりお尻を入れて、迷惑そうに鳴き声を上げる彼を両手で抱え込んだ。
涼太くんはリュックを開いてごそごそと探っていて、取り出した手のなかには、いろんな種類のポケット菓子が山盛りにのせられているのだった。
「バナナ味じゃないよ」
そういって、たくさんのお菓子のなかから、個包装されたひとくちサイズのチョコレートをつまみ上げた。そして、彼に促されるまま差し出したわたしのてのひらのうえに、ぽんと落とした。
「わたし、バナナ嫌いなの」とわたしはいった。
「うん、知ってる」と涼太くんはさもあたり前のようにうなずいた。
このあいだまで知らなかったくせに、とはいえなかった。

「心ないことば、っていう文句があるじゃない？」
わたしは顔を上げずに、手のなかでもてあそんでいるチョコレートの包みをじっと見つめた。ハルミチが、腕をすり抜けてどこかへ行ってしまった。
「僕に向かっていってる？」
涼太くんは左手いっぱいにのせられたお菓子の山からキャラメルを選び、残ったものをリュックのなかへ戻した。
「そうじゃなくて、そういう文句があるでしょっていいたいの。不平っていう意味での文句じゃないよ」
「ああ、うんわかった。そういう語句があるでしょってことね」
「あれってさ、人間に心があるっていう前提で出来た語句だよね」
「うん、そうだね」
「やっぱりさ、人間には心があるんだよね。前提として」
彼はキャラメルを口に放り込んでから、うん、そうだねと繰り返した。
わたしはそれ以上は何もいわず、手のなかの包みを開けて、表面がいくらか溶けてしまっているチョコレートを指先でつまんで口に入れた。そして、行儀の悪いことは承知しつつ汚れた指先をぺろりと舐めて、ローテーブルに置いてあったティッシュペーパーで拭った。
「ほんとに辞めちゃうつもり？」
しばらくしてから涼太くんがぽつりといった。彼の視線はイーゼルに置かれたスケッチブックに向けられている。それは描きかけの鉛筆画で、上の方には近所の公園で撮った写真をクリップで留めてあった。
「わからない」
わたしはスケッチブックから目をそらして首を振った。
「辞めるなら、ちゃんと辞める前に教えてよ」
「うん」
「ちゃんとだよ？」
「わかってる。しつこいな」
「だってそうなったら話さなきゃいけないでしょ、ちゃんと。ふたりの将来のこととか」
彼のそのせりふに、わたしはほんとうにちょっと驚いて、思わず眉間に力が入ってしまったためどうしようもなくて、そのまま目を細めて涼太くんのことを睨んでみせた。彼はひと言、「おお怖い」といってそっぽを向いた。
それからの数分間は、訪れた沈黙に翻弄されるように、親指のささくれをいじってみたり、キャラメルの包み紙を丁寧に折りたたんでみたりしながら、いささか気詰まりな時間をそれぞれに過ごした。この無言の時間を作り出した原因は果たしてどちらにあるのか、あるいはどちらにあることにすれば丸く収まるのか、落としどころを見極めようとしてみたものの、どちらにせよ、失った時間を取り戻せないのと同じように、余分に生まれた時間も消失しやしないことに気がつき、考えるのをやめた。
やがて、いたたまれなくなったのか、涼太くんが「ねえ千砂ちゃん珈琲を淹れてくれる？」と遠慮がちに頼んできたけれど、珈琲を飲む彼を見たくなかったわたしは、「そうだおいしいぶどうジュースがあるんだ」といって冷蔵庫に向かった。
わたしは瓶のジュースをふたつのグラスに同量になるよう慎重に注ぎながら、ぶどうジュースが決め手になる探偵小説について涼太くんに語って聞かせた。彼は「ふーん」といって、ちゃんと聞いているのかいないのかよくわからない反応だったが、それでこそいつも通りの彼のような気もしたし、そうじゃないような気もした。

珈琲の一件以来、気がつけば、いつもとちがう彼はいったいどこに潜んでいるのだろうと考えている自分がいた。それはグラスを口につける角度だろうか、わたしを引き寄せるタイミングだろうか、それとも、触れた唇の温度にさえ、わたしの知らない彼が隠れているのだろうか。

涼太くんの髪に指を沿わせてみても、肌をきつく擦りあわせてみても、その髪のうねりの一本一本が、そのざらついた肌を形作っている細胞のひとつひとつが、もしかしたらそれははじめから知らなかったものなのかもしれないという疑惑を起こさせ、わたしのなかにすでに存在している彼への愛情と、たったいま生まれたばかりの恐怖が、いちどきに全身を駆け抜けるのだった。

これまでいくども彼の背中に腕をまわしながら無意識のうちに計っていた肩の厚みに身に覚えのない感触を抱き、思わずはっとからだを離すと、「どうしたの？」とふしぎそうに彼が聞いたけれど、それはもうわたしの知らない涼太くんなのだった。どこかへ行ってしまった涼太くんを探しながら、わたしは「ううん何でもないの」とささやいて、また彼の胸に顔をうずめた。

名前に祭という字が入っているにもかかわらず、中学校行事の一環であるためそこに騒々しさや美しさ、華やかさなどはほとんど見られないけれど、文化祭特有の、普段にはない賑やかな雰囲気が生徒たちの心をそわそわと浮き足立たせていた。

美術部の展示は美術室で行われている。展示だけなので誰かが常駐している必要はないが、部員たちは各々時間を見つけて様子を見にくると話していた。わたしも、構内見回りの担当の空き時間にはなるべく美術室にいるようにした。飲食や物品販売に比べれば盛況というほどではないものの、ぽつりぽつりと入れ替わりで誰かが訪れるといったところで、たいていは順路に従ってひと通り作品を眺めたら出ていくが、しばしば美術愛好家を気取った誰かがやって来て、「この作品はいいね」と同行者にささやいているのを聞くと、思わず笑みが浮かんできたりもした。

西野さんの自画像もぎりぎりで完成して、教卓の近くにイーゼルにのせて飾ってあった。カリスマと呼ばれる類いのスペシャリストがどれだけ苦心しても表現できないと思えるような、自然が作り出したうねりを持つ髪の質感を、どうしても納得がいかないと何度も描き直していた。黒にもいろんな黒があって赤みや青みを足してみればいいよ、と助言をしてからはすこしはマシになったものの、ずっと深みにはまっている様子だった。最終的には濃淡をつけた紺色と焦げ茶色をところどころに入れることによって、そのなめらかな、それでいて張りのある質感を表現したようだった。こうやって展示されているのをみても、どの作品にも引けを取らない素晴らしい出来だと思った。まるで、はじめからこの絵が描かれていたみたいだった。たしかにわたしの記憶に残っている橋脚の絵は、はじめから存在していなかったのかもしれない。そうだったとしても、おかしなことなど何もないように思えた。

室内を見渡すと、どうやら来場者は皆立ち去ったようだった。

こうして美術室から誰もいなくなる瞬間があると、開け放されたドアの向こうから聞こえるざわめきが、この部屋にいるとこんなにも遠く感じられるのだということに突然はっとなり、もしかしたらいま自分はすきまの空間にはまっているのかもしれない、といった感覚に囚われるのだった。それは、日常でもしばしば起こりうる、時間の流れの速度に思考が遅れてしまうために生じるちょっとしたずれの感覚で、あの電車で体験したぶれとはまったく異なるものだった。けれども、もしかしたら、そのちょっとしたずれが、ちょっとどころじゃないずれとしてやって来たことによって空間が大きくぶれてしまった、とい

うのがこの現象のからくりなのかもしれない、とも思った。ちょっとどころじゃないずれがなぜやって来たのかはわからないけれど、わたしや霧島さんに訪れたおかしな状況は、そういった、そのときたまたまいつもよりずいぶん多めにずれちゃいましたよ、といったような、偶然がもたらしたものなのかもしれなかった。

わたしは吸い寄せられるように窓辺へと近づいた。

カーテンを寄せて、つつじの植え込みに差し込む光へ、惜しむように手を伸ばした。きらきらとしたしずくをてのひらですくっていると、背後でばんと何かを床に叩きつけるような音がし、それとほぼ同時にばらばらと軽いものが散らばる気配があった。驚いて振り向くと、入り口に西野さんが立っていて、口に手を当てて、しまったという顔をしていた。彼女の足もとの床には、絵筆や絵の具などの画材が散乱していた。

「すみません」

西野さんはわたしに向かって謝ってから、さっとしゃがんで落ちたものを拾いはじめた。わたしが彼女に歩み寄ると、やや自由の制限された左手に持てるだけの絵の具のチューブを掴んだ西野さんは決まりの悪そうな顔をして、「誰かが作業台に置きっぱなしにしてたみたいで、片づけようと思ったら取り損ねちゃいました」と早口で言い訳をした。

わたしは西野さんの傍らにしゃがみ込み、特徴のある大きな絵筆を拾い上げ、その持ち主を思い浮かべながら「畑中さんね」といった。西野さんは大きくうなずいて、肩をすくめた。ルーズなところのある畑中さんだが、西野さんと仲がいい。このあと本人に会ったら、きっと冗談めかして苦情を申し立てるのだろう。わたしは近くに落ちていた絵の具ケースを拾い、西野さんから絵の具のチューブを受け取って、ひとつひとつしまっていった。

「先生ぼーっとしてた？」

唐突に西野さんが尋ねてきた。彼女は手を伸ばして絵の具をかき集めながら、上目遣いでこちらを見ていた。

「わたしが入ってきたこと、気づかなかったでしょう」

わたしは西野さんの方を見ずにうなずいた。

「あまりにも外がきれいだったから」

「外がきれいって？」

「よく晴れてるから、光がきれいだったの」

「光……？」

「そう、光」

わたしは立ち上がり、拾い集めた画材を、展示の邪魔にならないよう壁際に寄せてあった作業台のうえに置いた。西野さんも続いて立ち上がり、わたしに倣って画材を置いた。

西野さんはうつむいたまま、畑中さんの画材一式を手早く揃えていた。教師とふたりきりの状況が照れくさいのか、いくぶん気後れしている様子だった。それは、わたしの知る西野さんだった。けれども、それは表面的なもので、すでにちがう西野さんが彼女のなかに入り込んでいるのかもしれなかった。ねえ西野さん、といって声をかけようか迷っていると、相手の方が先に「そうだ」と手をたたいた。

ぱっとこちらを振り向いた彼女は、打って変わっていたずらを企む幼い子どものような目をしていた。「ねえ先生。先生は卵焼きは砂糖派？　それとも出汁派？」

「えっ……」

とっさには何も答えられなかった。すこし間をおいてから、「わたし、卵焼きは塩派なの」と目を伏せて、ぼそりと答えた。

西野さんは、へえといった。彼女がどういうつもりなのか、その短い返答からではよく

わからなかった。
　それから、西野さんは「ねえ先生」ともう一度いった。この感覚は以前にも経験があった。彼女が「ねえ先生」と何度も呼びかけるのは、ほんとうに聞きたいことがまだ他にもあるという証拠だった。
「完全な人間っていうのかな」
「完全な人間？」
「とても変な考えかもしれないけど、気になって仕方がないんだ。あのね、たとえばね、製品なんかだと工場から出荷されてきた状態で完成品だよね。それと同じ原理だとすると、人間は生まれてきたところで完成品なわけだよね？　つまり、その時点ですでに完全に人間なわけ。人間じゃない状態で生まれてきて、成長して人間になるわけじゃない。生まれたあとに成長するかもしれないけれど、生まれた時点で人間であることは決まってる。つまり、生まれたときに完全を手に入れてるわけ。そこから何かを失っていくことはあるかもしれないけれど、生まれた時点ですでに失っていたものは、失った状態で完全だってされちゃうんだよね。でも、これってほんとうに完全なのかな？　わたし、いつも疑問なんだ。わたしっていう人間はほんとうにこれで完全なのかって。わたし、ずっと、自分は欠陥人間なんだって思ってた。わたしの左手のここには、本来なら親指があるはずのここには生まれたときから何もなくて、わたしにとってそれはあたり前のことだったけれど、人間にとってそれはあたり前ではないんだって知ったときに、わたしには欠陥があるって気がついた。それからは、何ていうんだろう、ことばで表現するのはとてもむずかしいんだけど、わたしは生まれたときからずっと間違ってしまってたんだっていう、そんな気もちが心のなかにいつもあったんだ」
「あのね、西野さん」わたしは西野さんにあらためて向き直り、今度はしっかりと彼女の目を見た。「わたしは、その質問には答えてあげられない。なぜなら、わたしもまったく同じ疑問を、もうずっと、ずっと抱きつづけているからよ」
　わたしは、左手の親指を持たない彼女を、そのフォルムがどうこうではなく、そういった状態で存在している彼女そのものを美しいと思った。完全な人間がいるかどうか、彼女が不完全なのかどうか、そんなことはわたしにはわからなかったけれど、あきらかにシンメトリーとはいえない不均衡な状態で均衡を保っている彼女を、そうであるがゆえに美しいと思った。でも、だからといって「あなたは美しい」なんてことはとてもじゃないけどいえなかった。それは、わたしが彼女を羨んでいるからだった。わたしは、西野さんに左手の親指がないことを心から羨ましいと思っていた。わたしにとっては、わたしに左手の親指があること自体が欠陥なのだった。いや、左手の親指に限らず、わたしが何ひとつ失っていないということが問題だった。それゆえに、いつも何かが不足しているような歯がゆい気もちを抱え、どこかで波風が立つことを心密かに願っていた。どうやらそのおかげでいま大きなつけを払わされてしまっているらしい。この状況を「つけを払っている」と表現するのならば、わたしこそ、生まれたときから間違っていたのだといえるだろう。
「全然いいよ」西野さんは明るくいって、視線を下に向けた。それから、その場にすっとしゃがみ込んで、作業台の脚もとに落ちていた拾い忘れの絵の具をつまみ上げた。そして、下を向いたまま続けた。「答えを期待してたわけじゃないから。ただ、何だろ？　藤井先生は、最近ちょっと変わったような気がする」
「えっ……？」
「部活のときもいつも絵を描いてて、話しかけにくくなったっていうか」
　思わずからだが動いて、作業台に腰がぶつかった。がたっという音に西野さんが顔を上げる。後ろできゅっと結ばれた髪が彼女の動きに合わせて、ゆらりと揺れた。

「変なこといってごめんなさい」
西野さんは慌てて立ち上がり、わたしの手に絵の具を押しつけた。そして、「それじゃ、失礼します」とぺこりと頭を下げて、足早に出ていった。
わたしは、西野さんが消えたあとの教室の入り口をずっと見つめていた。てのひらのうえの絵の具のチューブが、ひんやりとあつかった。

文化祭が終わってしばらく経った頃、母親から電話があった。
「木村さんからお米いただいたから、あんたのとこにもおすそわけで送っといたで」
久しぶり、の挨拶もなく母がいった。長いあいだ絵画教室で子どもを相手にしているからか、母のしゃべり方は語尾まできっちりと発音されて聞き取りやすい。ただすこし早口なため、小中学生からすると急かされているような気になるかもしれない。
「ありがと」わたしは、実家のとなりに住む木村さんの、大福みたいにふっくらとして柔らかそうなほっぺたを思い浮かべた。「木村のおばさんにもお礼ゆっといてな」
実家を離れてずいぶん経つが、母と話していると自然と関西のことばが出てくる。
「もうゆったわ。ちゃんとあんたの分まで」
「そりゃ手際のよろしいことで」
「みかんは来月やから」
「わかっとるよ」
そこで母はすこし黙った。何か別に本題があるようだ。
「なあ枚方の役所からまた連絡がきてん」
「ふーん」
「草がな、こう、夏のあいだにぼうぼうになってしもうたんかもしれへんわ」
「あっそう」
わたしはわざと気のない返事をした。
母がいっているのは、金柑の木のあるわたしの生家のことだった。
母は結婚して和歌山に移ったが、里帰り出産をしたのでわたしは大阪の枚方で生まれた。長年祖父母がふたりで暮らしていたのだが、六年前に祖母が肺炎をこじらせて亡くなったあと、もともと認知症の気配のあった祖父の病状も一気に進行してしまい施設に入院することになったため、住む人がいなくなった。はじめは、いつかおじいちゃんが戻るかもしれないからと母の希望でそのままにしてあったのだけれど、残念ながら、その祖父も病状の改善が見られないまま五年前に他界した。
和歌山の南部に住むひとり娘の母が大阪の北摂地域にあたる枚方市までしょっちゅう通って無人の家の管理をするのもたいへんということもあり、せいぜい年に一度訪れたらいいところで、実質ほとんど放置状態だった。小さいながらも庭があるのだが、やはりずっと放っておくと雑草が伸びてきてしまい、虫がわいたりすることもあって近隣住民から苦情がくるらしい。それに空き家というのは放火される危険性があるため、ちゃんと管理してくださいねという連絡が役所からたびたび封書で届くのだそうだ。
お盆に和歌山に帰ったときにもその愚痴を聞かされた覚えがあるけれど、そのあとまた連絡がきたのかもしれない。何年か前に腰を痛めてから、どうも母は大阪に行くのを億劫がっているふしがあった。そろそろ売却を考えるべきだと再三申し入れてはいるが、思い出が邪魔をするのか、いっこうに重い腰を上げようとはしてくれない。
「なあ千砂ちゃん」母がわたしの名前をちゃん付けで呼ぶなんて滅多にない。何か頼みにくいことを切り出そうとしているからだろうか。それとも、母のなかにもわたしの知らない部分が現れ出ているのだろうか。「ちょっと行ってきてくれへん？」

「わたしが？」
訝しんでいるからか、警戒しているような声が出た。
「あんたしかおらへんもん」
「お父さんは？」
「そんなんお父さんが行くわけあらへんやろ」
「それもそうやけど……、」
ことばを濁していると、ふと金柑の木が頭をよぎった。話題を変えるため、「そういえば、あの金柑の木はどうなったんやろ」と何気なく聞いた。
「何ゆってんの、金柑なんてあらへんよ。柿やで、柿」
「柿？」
「そうそう。おじいちゃんが、ずっと大事にしてた」
「金柑やろ、金柑の木。黄色い小さな実をつける」
「あんた何か勘違いしてへん？」
背筋がすっと寒くなるのを感じた。
「あのさ、お母さん」声が深刻にならないよう気をつけながら、思いついたままを頼んでみた。「むかしのアルバムを送ってくれへん？」
「アルバム？　そんなんたくさんあるけど、ぜんぶ必要なん？」
「ううん。枚方の家で撮ったやつだけでええから」
「かさばるからアルバムじゃなくて写真だけ送ろうか」
「その方が助かる」
「柿の木が写ってるやつを送ればええな」
「……うん。そうやね、庭の様子がよくわかるやつがいいな」
「あんたまだ金柑やって思ってるんやろ」
まあ写真を見れば思い出すわ、と母は大きく笑った。結局草むしりの話はうやむやのまま、写真を送ってもらう約束だけを交わした。
数日後、実際に送られてきた写真を見てみたが、古い写真だから写りが悪くはっきりとはいえないけれど、明らかに幹の太さや背の高さがちがっていて、やはり庭にあるのは金柑の木ではないように思えた。
その翌日、授業の合間に美術室を訪れた。準備室に起きっぱなしにしてある自分の作品が気になって仕方がなかったのだ。金柑の木を描いたあの絵にはここ最近手も触れておらず、布をかけたまま準備室にしまいこんであった。
わたしが描いたあの絵は、いったい何の記憶を描いたものなのだろう？　たしかにあったはずなのは、金柑ではなく柿なのだという。だとしたら、わたしが描いた絵も、金柑ではなく柿の木だったのだろうか？
準備室の扉のノブを握ると、急に、ざらざらとした砂を飲み込んだみたいに喉の奥が痛くなった。血管に熱湯が通されたみたいに、わっと全身が熱くなり、指先がぴりぴりした。わたしは何かに追い立てられるようにして、扉を開けた。
準備室の蛍光灯は手前のひとつが切れていて、ずいぶん前に報告してあるにもかかわらず、いっこうに替えてもらえないため、ずっと薄暗いままだった。この狭い部屋がすこしくらい暗くても授業に差し支えはないが、美術部の活動が終わって鍵を閉める際に覗くと、こういうところから学校の怪談話は生まれるんだろうなと思えるくらい、薄気味悪く感じることもあった。
準備室には、錆の浮いた古い鉄製の棚と、比較的新しいステンレスの棚が混在していた。耐久性の高い新しい方の棚には、美術の授業で生徒たちが作った、架空の動物や妖精の

顔をお面にしたものや、彫刻刀で掘り出した木靴など、優秀なもののいくつかを大切に保管していた。これは、玄関や廊下の展示棚に飾るために預かっているものだった。一方、いつ壊れてもふしぎではないくらい赤錆に浸食された古い方の棚は、主に授業で使う画材や備品を置くのに使用していた。ふたつある古い棚のうちの片方は、磨りガラスのはまった小さな引き違いの窓をふさぐように配置してあって、そのいちばん下の段の、空いたスペースに、自分の作品を立て掛けてあった。

これまでだって、何週間も放りっぱなしにしておいて久しぶりに取り出すこともあった。それなのに、なぜだろう、胸がざわついた。このキャンバスに掛かった布を取り去ってしまったら、とんでもないことを目にしてしまうのではないか。そんな嫌らしい予感がべたべたと皮膚にまとわりついてきた。

わたしはゆるゆると手を伸ばし、膝の高さくらいにあるキャンバスに被った生成りの麻布を指先でちょんとつまんだ。そのままの状態でしばらく逡巡してから、そろりそろりと布を手前に引っ張った。一気に引く勇気はなく、自動で舞台の幕が開くくらいのスピードで、ゆっくりと布を取り去った。

そこには、たしかにわたしが描いた金柑の木があった。絵の具を足せば足すほどに重々しさが増していく、緑の枝と生茂った葉、そして小さく光る黄色い実。前回描いたのと寸分たがわない状態で、ちゃんとそこにあった。

わたしは、ふうと長い息を吐いて、その場にしゃがみ込んだ。ほっとしすぎて頭が痛かった。だが、すぐに自分が何に安心しているのかわからなくなった。記憶のなかにあるはずの金柑の木が、実は柿なのかもしれないのだ。金柑が柿に取って代わったのか、それとも、もしかしたらわたしの記憶の方が削除されて、新しいものに入れ替えられてしまったのかもしれない。

カメラに収めるフィルムがほんのすこしずれただけでそこに写る写真もすこしずつずれていってしまうように、一度ずれたものはもとには戻せず、また、あとのすべてはずれ続けたままなのだ。ずれていることに気がついたのなら、思い切って蓋を開けて、フィルムを光にさらしてしまうべきなのだろうか。すべてをなかったことにしてしまえれば、どんなにかいいだろう。わたしという容れ物の蓋をこじ開け、中身をぜんぶ光にさらしてしまえれば。ポケットを裏返してなかに溜まった埃を払うように、わたしの中身を、脳の襞のぜんぶを裏返し、引き伸ばして、そこに溜まった記憶を、まちがった記憶を、光にさらしてみんな焼き尽くしてしまえれば、どんなにかいいだろう。

霧島さんと会って話がしたかった。彼女なら、整理しきれずに入り組んでしまった頭のなかにある考えを、思いつくままに吐露したとしても「さあ順序よく並べ替えましょう」といってくれるような気がした。

ところが、涼太くんに電話をかけて霧島さんの連絡先を教えて欲しいと頼むと、彼は思いのほか難色を示した。

「どうして、霧島の連絡先が必要なのさ？」

涼太くんにしてはめずらしく攻撃的な物言いだった。いつにない様子に不安を感じたが、そういえばと思い直した。彼はまだ、霧島さんがいまは女ともだちになっていることに気がついていないのだ。

「あのね、涼太くん」わたしは携帯電話を耳にあてながら、ちょうど目の前にあった、親指の先くらいに小さなおもちゃの車を、指先ではじいてテーブルのうえを走らせた。これは、以前涼太くんに貰ったお菓子についていたおまけだった。「霧島さんは男のひとではないのよ」

「そりゃあさ、僕だって別に千砂ちゃんがあいつを男として意識してるって思ってるわけじゃないさ」
「そうじゃなくて」
「けど、いちいちそんな風に言い訳がましいところが気に入らない」
わたしは、あははと笑った。
「なにさ？」
「そんなにふくれないでよ」
「なんだよ？」
「霧島さんね、いまは女のひとになってるみたいよ。詳しくは聞いてないけど、性別適合手術を受けたみたい」
「は？」
「やっぱり気づいてなかったんだ。お店にチラシを持って現れたときに変だなって思わなかった？」
「え？　へんってなにを？　あいつ、いま女のひとなの？」
「うん、とにかくそうなの」涼太くんの理解が追いつくまで待っていたら日が暮れそうなので、わたしは先を促した。「だから何も心配はいらないのよ。わたしに霧島さんの連絡先を教えることについては」
「いや、ちょっと待ってよ。それってそういう理屈になるのかなあ。ええっと」
「理屈なんてどうでもいいじゃない」
「ほんとにちょっとだけ待って。霧島が女だって？　千砂ちゃんがそんな嘘をつくわけがないからほんとだと信じるとして、でも、だからってさ、僕が勝手に霧島の連絡先をきみに教えていいって道理にはならないだろう？」
「けち」
「僕はけちなの？　慎重だっていって欲しいなあ」
「慎重派のけち」
「結局けちなんだ」
「すっごく残念」わたしは間をおそれ、早口で彼をなじった。涼太くんに対しておかしさを感じてしまう間を作りたくなかった。「涼太くんはもっとわたしのことを信用してくれてるって思ってた。もっと、わたしのことをわかってくれてるって思ってた」
「あのさ」彼の声の調子が変わったのがわかった。「まるで僕がきみの理解者であることが当然みたいな口ぶりだけど、」声色に不快感が読み取れて、どきりとした。「きみの方では僕のことをちゃんと理解してくれてる？」
「理解って……、」
涼太くんが発したことばは、たっぷりと水を含んだタオルみたいにずっしり重くて、思わず落っことしそうになった。
「きみは、ほんとうの意味での僕の理解者なの？」
「涼太くん、怒ったの……？」
「僕が怒ったかって？　そんなのどっちだっていいじゃないか」
「よくはない」
「千砂ちゃんはずるいんだよ。いまの言い方だって、よくはないけど悪くもないっていってるように聞こえる。そうやって、断定せずに逃げ道を作る。僕のことを残念だっていったけど、その前に僕がどうしてためらったのかその理由を考えた？　きみは、自分の要求が通らなくて僕を責めてるだけじゃないか」
「たしかにそうだった」

ごめんなさい、と謝ろうとしてやめた。彼がそうは望んでいないと思ったからだ。けれど、ほんとうにそれが正しいのかどうかはわからなかった。彼がいうように、わたしはほんとうの意味での涼太くんの理解者ではないのだろうか。

電話の向こうでゆっくりと息を吸う気配があった。それから、涼太くんは溜めた息をふうと短く吐いてから、「僕にはさ」としずかにいった。その声には、さっきまであったとげとげしさが取り除かれていて、ほんとうはまだ怒っているくせに、感情のまま相手に怒りをぶつけたりなんて出来やしない、ほんのちょっと不器用で、やさしすぎるいつもの彼を感じた。あまりにも涼太くんらしくて、まぶたの裏がちかちかした。

「僕には、きみが急に変わってしまったように思えるんだ」涼太くんは、波のない海のような声で続けた。「いきなりたくさんの絵を描きはじめたかと思ったら、今度は写真を撮りだした。明らかに霧島の影響だとわかる。写真を模写してるんだっていうけど、僕がいても関係なく絵を描いてるだろう？　なんだって急にそんな風になっちゃったのさ。よくわからないけど、この頃ちょっと霧島に影響を受け過ぎなんじゃないの？」

どうことばを返していいのかわからなかった。

目の隅に映ったおもちゃの車を掴もうと腕を伸ばしたけれど、手もとが狂って取りそこねた。車はがたがたと頼りなく走って、テーブルの端から落ちていった。

わたしが何もいえずにいると、千砂ちゃんにけちと思われたままじゃ困るからといって、涼太くんは霧島さんの連絡先をメールで送ると約束してくれた。さらに、霧島さんにもそう伝えておくと几帳面にいい添えた。

電話を終えて何気なく腕の時計に視線をやると、さっき確認したときと同じ時刻を示していて眩暈がしたが、どうやら止まってしまっていたらしい。もしかしたら、もうずいぶん前から狂った時計をつけていたのかもしれない。

翌日、涼太くんからメールで届いた霧島さんの連絡先を、それを見て番号を打つことができるようにメモに書き写し、テーブルの目立つところに置いて、雑多な小物を入れてあるジャムの小瓶をのせて重しにした。けれども、彼の清潔な心をねじ曲げてまで手に入れた番号なのに、連絡する気になれずにいた。

その日も、夕食のあとぼんやりと彼女の番号を眺めていた。何度も見ているおかげで下四桁は完全に暗記していた。しばらくすると、静けさを破るのが申し訳ないとでもいうように、控えめに電話が鳴った。ディスプレイに表示されているのは未登録の番号だったが、さいごの四桁に見覚えがあった。思わずメモと見比べると、十一個の数字はまるきり同じ配列だった。

電話に出ると、霧島さんはまず「ごめんなさい」と謝った。

「千砂ちゃんの番号をわたしが知っていることで、町田に非はないのよ」彼女はわたしに口を挟む隙を与えずしゃべり続けた。「わたしが無理やり聞き出したの。はじめは町田から、千砂ちゃんにわたしの番号を教えたって謝罪のメールが来たんだけど、わたしそんなことまったく気にしないから、何を謝ってるのかさっぱりわからなかったの。だから、何を謝ることがあるのよって電話をしたら、わたしが女になってることから話を始めようとするんだもん、もうもどかしくって。町田ったら何も知らなかったのね。こっちはとっくに知ってるものだと思ってたのよ。で、よくよく聞いてみると番号を教える教えないで千砂ちゃんと気まずくなったなんていうから、びっくりしちゃった。そんなくだらないことで喧嘩できるものなの？　わたしの番号なんてぐちぐちいわないでさっさと教えてあげればよかったのに。わたしそのことで散々町田を責めたの。だから、千砂ちゃんはもう責めないであげてね」

「はあ」

「でね、町田が千砂ちゃんにわたしの番号を教えたって聞いたものだから、あなたから電話が掛かってくると思うじゃない？　なのにいっこうに掛かってこないんだもの。これでもわたし、かなり待ったのよ。待って、待って、待って、もう待ちくたびれちゃった」
「えっと、あの、霧島さん、ごめんなさい、わたし」
「だから、わたし町田に千砂ちゃんの番号を教えてって頼んだのよ。もう半分脅しよ。教えてくれなきゃ店に乗り込むわよって。まあ、それは冗談だとしても、脅したところでの性格じゃ教えたりしないわよ。わたし、すごくずるい手を使ったの。あなたの恋人に最近変わったところはないかしら？　わたしだったら彼女の悩みを聞いてあげられるわよって、そういったの。そしたら、しぶしぶ教えてくれた」
「そうだったの」
「そうだったのよ。でもね、千砂ちゃん、勘違いしないでね。町田がわたしの番号を教えたくなかったのは、わたしがまったくの他人だからなのよ。他人の番号を、いくら千砂ちゃんにだって勝手に教えてはいけないと思ったのね。でも千砂ちゃんは町田にとって家族みたいなものだから、家族の番号なら、ある程度信頼のおける相手になら教えてもいいと判断したのよ」
　それはわたしを安心させるための理屈だということはわかった。たとえ家族だからといって番号を教えていいということにはならないし、家族だからこそ教えたくないということもあるだろう。けれども、筋の通らない理屈をぐだぐだと並べるのはとても涼太くんらしいと思った。実際にそうやって長い言い訳をしたうえで、霧島さんにわたしの番号を教えたのだろうなと想像がついた。そんな、涼太くんの涼太くんらしさを感じるたびに、自分が別人に変わっていくような気がした。
「町田はね、あなたのことが心配なのよ。千砂ちゃんのことが、大すきなのよ」
「そう、なのかな」
「そうなの。わたし、あたなが羨ましいわ。すごく、すうごく羨ましい」
「えっと、霧島さん、何かあったの？」
　正直にいうと、わたしは早くこの電話を終わらせたかった。涼太くんと気まずくなってまで手に入れた番号だったけれど、いざ向こうから掛かってきてみると、話したい話などないように思えた。とても鼻がむずむずしたし、耳の奥がちくちくと痛かった。だから、彼女がそう聞いてほしいと思っているだろうことをそのまま尋ねたに過ぎないのだけれど、相手は気に入らなかったのか、唐突に声を尖らせた。
「何かあったかですって？」彼女はきっと、いまも室内にもかかわらずサングラスをしていて、その真っ黒なレンズの向こうでさっと眉をしかめたのだろう。「そういう意味ではね、何もないの。何かあったかなんて、くだらない質問よ。馬鹿らしい」
「ごめんなさい、そんなつもりじゃなかったんだけど」
「いいの。千砂ちゃんは何も悪くないの。ただ、わたしが何もかもを失ってしまったってだけ。ただそれだけ」
「どういうこと？　やっぱり何か、その……、あったんじゃ」
「何もないっていってるでしょう。ただあるのは絶望だけ」
　どうやら霧島さんは、わたしが思っている以上に動揺しているようだった。
「これはね、まるで空気で指を切るみたいなものなの」霧島さんはいった。つめたく、悲哀に満ちた声だった。「どうやったって防ぎようがないの。そこに空気があるだけでいともかんたんに指先を切ってしまうかのように、こうやって息をしているだけでわたしはどんどん傷ついていくの。どうしようもないの」
「でも、きっと解決する方法はあるはずでしょう」

「それが、ないの」
「あなたのその絶望は、わたしたちが迷い込んだもうひとつの世界に関係してるの？」
「関係してるともいえるし、そうじゃないともいえる」
「どういうこと？」
「きっときっかけはそれが原因なのね。わたしがおかしな空間に迷い込んだおかげで、わたしの恋人はすっかり変わってしまった。世界が大きく変化したわけではないのに、彼は完全に変わってしまったの。そして、きっとわたし自身も変わってしまったのよ」
わたしは息を飲んだ。そして、弱々しく同意した。「それはわたしも同じことを感じてる……、でもね」
「だめなの。変わってしまっては。あのひとは変わってしまっては、だめなの。でも、もうこうなってしまっては、もし、目に映る世界がもとに戻ったとしても、わたしたちふたりの関係性は崩れてしまったままなのよ」
「でも……、でも、きっと……、解決の道はあるはずよ」
「千砂ちゃん、わたしはあなたにそういって欲しくて電話をしたの。でもいまは、あなたにそういわせている自分に腹が立って仕方がない。あなただって苦しんでいるのに、そんなあなたに気を遣わせている。わたしはひどい人間ね」
そんなことないわ、と口にすることはできなかった。
「わたし、旅に出るわ。むかしは、旅先で偶然出会った虎に食いちぎられて死ぬのを夢見たことだってあったの。ほんとうよ。それがわたしにふさわしい死に方だって思ったのよ。ああ、でも安心して。いまはそんなことを夢見ているわけじゃないの。それだけ年を取ったということね。カメラはちゃんと持っていくことにする。虎に食われる瞬間、その口内に向かってレンズを向ける心構えくらいはあるのよ。まあそうはいっても、あなたや町田を心配させるようなことにはならないつもりよ。けど」そこでいったんことばを切って、彼女は強くこういった。「もう戻らないかもしれない」
絶望の仕方は人それぞれだ。望みを捨てたその向こうに、虎に食いちぎられたいという願望を見出すことだってあるのだろう。ただその願望からは、どんな種類の希望も生まれない。それが絶望というものなのだ。だとすれば、霧島さんのいったことと彼女を取り巻く現実のあいだには何の齟齬もない。彼女は正しく絶望したといえるだろう。
そうであるとすれば、彼女と同じ状況にいるわたしもまた、絶望すべきなのだろうか。旅に出て、犀に踏みつぶされるべきなのだろうか。それとも、ぶどうジュースに毒を一滴垂らし、苦みに気づく間もなくひといきに飲み干すべきなのだろうか。

この世界を動かしている誰かがいたずらに散りばめたたくさんの違和を、限りがあるのかどうかさえわからない数々の変化を、まるでまちがいさがしのように隅々までくまなく探しまわればどうにかなってくれるのであれば、わたしは世界の端から端まで何度だって走るだろう。シャーロック・ホームズのように大きな虫眼鏡を手にして、地面に這いつくばってでも、ひとつ残らず見つけ出すだろう。
ただ、そのまちがいがわたしのうちにあるのだとしたら。わたしがここへ辿りつく手順に大きな手違いがあったのだとしたら。
このところ、思考が頭のなかで暴走を繰り返していた。思考というのは宿主の意思とは無関係に分裂を繰り返し、発展していくものなのだろうか。本人が望んでもいないのに、どんどん新しい考えを生み出してゆく。
もしもあのときのあの電車の揺れが、無数に枝分かれする未来の、本来行くべきではなかった方にわたしを誤って導いてしまったのだとしたら、どれだけ探したとしてもこの世

界に異変などないのではないか。この世界で唯一異質なのは、いるべきではないのに存在してしまっているのは、わたしなのではないか。

いまここにいる「わたし」は、過去から連続して存在しているわたしなのだろうか。もしわたしが間違った方の未来に来てしまっているのだとして、正しい方の未来にもわたしがいるのだとしたら？　そちらの方が正しいわたしだといえるのではないだろうか。過去から連続して存在し続けているわたしは、正しい方の未来に行ってしまったのかもしれない。だったらここにいる「わたし」はいったい誰なのだろう？

たとえば、心を閉ざすことは、それほど複雑な手続きを必要としないかんたんでコンビニエンスな抵抗だ。わたしのなかから藤井千砂という個性を抹消し、ただのわたしになればいい。あらゆる違和を知らんぷりしていれば、誰にも見咎められることなく、涼太くんやハルミチにさえも気づかれることなく、ただのわたしになることは可能だろう。そうすれば、わたしは誰？　なんて面倒なことを考えなくてすむ。

けれども、消極的な抵抗は、キャンバスに布を掛けるようにそっとしまっておきたい場合には有効かもしれないが、そこから何かを生み出すことは決してない。非生産的に生きるよりも、たとえその先に絶望を見るのだとしても、みずから行動を起こしたい。わたしの頼りない意志が、弱々しくそう主張していた。

自分の生まれた家に行ってみようと考えはじめた背景には、そういった、明快とはいえない、でも断じて後ろ向きではない心の動きがあった。とはいえひとりで行くのには勇気がいったので、気まずさはまだ残っていたけれど涼太くんを誘った。わたしが何か行動をするのなら、彼が必要だということだけははっきりしているのだ。同行を求めたとき、詳しい事情を尋ねたりはせず、彼はひとこと「いいよ」といった。

十一月はじめの土曜日。日帰りのつもりで朝早くの新幹線の切符を二枚予約した。待ち合わせに指定した横浜駅のホームにいつもの薄っぺらいリュックを背負ってやって来た涼太くんは、相変わらず眠そうな顔をしていたが、何のわだかまりもない様子に見えた。もしかしたらそう装ってくれていたのかもしれない。座席についてから、何を持ってきたのかと聞くと、旅の友さといって、彼はリュックの口を開けて小袋のお菓子や、甘ったるい飲み物を見せてくれた。目的地で使うのに必要なものはきみが持ってくるだろ？　だから僕は道中に必要なものを持ってきたんだよ。そう豪語するだけあって、お菓子の袋の下から出てきたのは、スライド式の数字パズルと知恵の輪という、むかしはよく旅館などで見かけた、ちょっとした時間つぶしにはうってつけの娯楽品だった。

涼太くんが、缶入りのカルピスウォーターとパック入りのバヤリースオレンジを取り出して、どっちだといった。ふたりともバヤリースを指差したのでじゃんけんをして、わたしが勝ち取った。一方数字パズルと知恵の輪はすんなりと行き場が決まった。わたしがどっちでもいいといったからだ。解けたらもうひとつあるよ、といって涼太くんは知恵の輪をわたしの手にぽんと置いた。ところが、時間つぶしだと侮っていたら、とんでもない、かぶりつくようにして必死に取り組んだけれど、繋がったふたつの複雑な形の金属の輪は、いっこうに分かれてはくれなかった。

「さっき富士山が見えたよ」

匙を投げたわたしが、涼太くんの手に繋がったままの知恵の輪を放り投げると、彼は呑気な声でとんでもない報告をした。

「えっどうして教えてくれなかったの？」

「だってきみがあまりにも真剣だったから」

わたしが彼をにらんでいるあいだに、「ほら」といって、涼太くんはみごとに外れたふたつの輪っかを見せてくれた。ぎょっとして、彼の手からふたたび知恵の輪を奪うと、力

づくで、もしくは何らかの魔法を使って、無理に外した証拠を探すかのように、凹の字の角を取ってぐにゃりとひしゃげさせたような形の金属を目の前に持ち上げてしげしげと眺めてみたけれど、力学的な作用が及ぼされた痕跡など、ましてや超自然的な力が働いた様子などは、当然ながらまるきり見つけられないのだった。
「そういえばいつもしてる腕時計は？」
涼太くんは覗き込むようにしてわたしの左腕を見ていた。彼は、その腕時計が両親からの贈り物だということもよく知っていた。
「壊れたから修理に出してるの」
わたしは上着の袖をめくり、何もない左手首をさらした。
「時間がわからなくて不便だなあ」
「スマホがあるから問題ないでしょ」
「自分で見るのがめんどくさいから千砂ちゃんに聞くんじゃない」
「わたしは時刻屋さんじゃないのよ。次からはお金とろうかな」
「一回十円で時刻を教えてくれるって？」
「とくべつ料金で時間を売ってあげることもできるよ」
「べつにいらないや」
「いらないの？」
「時間なんて僕にだって売るほどあるさ。それをうまく使うのが難しいってだけ」
そういって、彼は両腕を頭の上にあげて、伸びをした。
座席はほどよく埋まっており、いくつかの駅を過ぎたころには空席はなくなっていた。とくべつなときにだけ持ってくるんだ、と得意気にいってリュックに手を突っ込んだ涼太くんが、そこそこ大きなルヴァンの箱を取り出したときには、まるで四次元ポケットから秘密道具が現れたみたいにびっくりし、またそれ以上にあきれた。簡易テーブルを下ろして口を開けたルヴァンの小袋を置いて、ふたりで交互に手を伸ばした。
「ねえ涼太くん」
パーカーの胸に落ちたクラッカーのかすを払いながら、わたしは何気なく声をかけた。
「なに？」
涼太くんは頬杖をついて窓の外を眺めていたけれど、さっきから同じような景観ばかりが続いていた。
「自分の周りが、気づかないうちに変わってしまっていたら、どうする？」
彼は背もたれにからだを押しつけるようにしてこちらを向いて、うーんとひとしきり唸ってから、「嫌ないい方をしたことは反省してる」といった。「すこしくらい変わったところで千砂ちゃんであることに間違いはないんだからさ」
もしかして、わたしが仕返しのつもりで聞いたと思っているのだろうか。
「そうじゃなくてさ。変わった本人には自覚がないんだよ。そして、変わった分だけ、過去もつじつまを合わせるように修正される」
「恐怖映画の話？」
「ちがうわ」わたしはルヴァンの袋から新しい一枚をつまみ出し、口には入れず、それを見つめた。「ただ、ある日気がついたら、周りの人や物が知らないあいだにちょっとだけ、すり替えられてしまっている。かといって、その人とつき合っていくことや生活するのに困るほどではない。ぼんやりしていたら見逃してしまう程度に、ごくわずか。ほんの、ちょっとだけ」
「恐怖映画よりこわいかもしれないね。僕だったら、そうだなあ、どうするだろう？　わからないけど、千砂ちゃんやハルミチがすり替わってしまったら嫌だなあ」

「わたしが変わったとしたら、どうする？」
「でも、具体的に何が変わるのさ？　ほんのちょっとっていってもさ、千砂ちゃんは千砂ちゃんなんだろ」
「たとえば、わたしが珈琲を飲まなくなったり」
「変わったのがそれだけだったら、やっぱりそれは千砂ちゃんなんじゃない？」
「わたしが絵を描かなくなったり」
「それでも千砂ちゃんだね」
「ハルミチのことを蹴っ飛ばしたり」
「それはやっちゃだめ。誰だろうと、誰じゃなかろうと」
「そうだね」
わたしは手に持ったままだったクラッカーを小さくかじった。
「たとえば、もし千砂ちゃんが急に僕のことを嫌いになったら、ちょっと疑うかなあ」
涼太くんはカルピスウォーターをひとくち飲んで、ちらりとわたしの顔を見た。それから自分の手もとに視線を落とし、呟きの延長のような声でいった。
「そうなると僕が困るからね」
涼太くん越しに見える窓外の風景に、いつのまにか住宅が増えてきていた。彼は半分ほど残ったカルピスウォーターを、はいといってこちらに渡した。別に欲しくなかったけれど、仕方なく飲んでみると、思いのほかさらっとした甘さが広がった。やがてその甘さは、しみ入るようにからだじゅうに浸透し、わたしを潤した。
大阪に着いてからは在来線に乗り換えて枚方市駅まで行き、チェーンの牛丼屋で早めの昼食をとってから、地図を頼りに歩いて生家へ向かった。散々迷うことも想定していたのだけれど、小学校の高学年になるまで長期休みのたびに滞在していたためか微かな記憶が残っており、思いのほか早く目的地に辿りつくことができた。
生家に行くついでに草むしりも引き受けると連絡したら、母はおおいに喜んで早速鍵を送ってよこした。
「鍵は勝手口のん送るからさ、使ったらあんたがそのまま持っといて」
母は上機嫌だった。そして、鍵は送るけど電気も水も通ってへんから家のなかに入ったって何もできひんよ、とつけ加えた。
母親から送られてきた鍵で開けた勝手口をくぐると、こもった黴の匂いが闖入者であるわたしと涼太くんに襲いかかった。あらかじめマスクを付けていたけれど、それが気休めでしかないことに早い段階で気づかされたのだった。だがその程度のことは予想の範囲内だったので、ひるむことなく靴を脱いで室内に入り、持参したスリッパに履き替え、台所へ続く埃の積もった狭い通路をそろそろと進んだ。祖父が亡くなってから五年間ほとんど放置されていたわけだから、惨状も当然だといえる。
誰も住まなくなった家はそれだけで老いてしまうのか、土壁は手をつくたびにぽろぽろとこぼれ落ちていくし、床板はそっとつま先を乗せただけで不穏な音を立てた。
わたしのあとについて入ってきた涼太くんが、「これはビニールシートを敷いてお弁当というわけにはいかなさそうだね」といった。
入ってきたときに勝手口の扉に石を挟んで透かしておいたので、その隙間から長いあいだ閉じ込められていた嫌な空気がある程度逃げてしまうと、かわって入り込んできた新しい風が、淀んだ家のなかをゆっくりと巡りながら洗浄していった。
ふたりで手分けして家じゅうの開口部を片っ端から開放し、薄暗かった室内に光を差し入れた。ようやくマスクを外すことができ、新鮮な空気を吸い込んだ。
そして、わたしは首から下げていたカメラを構え、建物が経た、時の流れを遡るように

シャッターを押していった。
ここに来る目的のひとつが、これだった。この家のむかしの写真が存在しているのだから、新たに撮った写真と見比べられるわけで、もしかしたらそこに何かしらのヒントを見出せるかもしれないと思ったのだ。
カメラの画面越しに隅々を眺めながら、この家に染み付いている記憶と、わたしの頭のなかの記憶をすり合わせていった。二段とばしで駆け下りて転んでしまい、こっぴどく叱られた苦い経験のある階段や、何度壊れても修理を繰り返して使っていた二層式洗濯機の置かれていた広い脱衣所、大嫌いだった汲み取り式を祖父母のために水洗式に作り替えたトイレなど、埃まみれになっているにもかかわらず、驚いたことにすこしの違和もなくそれらの記憶を呼び覚ましてくれる物たちが、ここにはあるのだった。
ところが、仏間の縁側から裏庭を覗くと、そこには立派な柿の木があった。ずっと放っておかれたのに枯れることなく黒々とした枝を伸ばしていたが、実はひとつもついていないようだった。柿の木があったことをいまさら悲しいとは思わないけれど、金柑の木を覚えていたわたしのことが、まるで他人事のように、いくぶん気の毒に思われた。
ぼんやりと庭を眺めていると、家じゅうをまわってきたらしい涼太くんがやって来て、横に並んだ。
「ここが千砂ちゃんの生まれた家か」
わたしはうなずいた。
「これってすごく意味のあることだと思う」涼太くんは前を向いたままきっぱりといった。「僕にとって、千砂ちゃんの生まれた家を見ることは、すごく意味があると思うんだ。そして、僕に意味があるということは、千砂ちゃんにも意味があるんだと思う。きっと」
となりに立つ彼の横顔を見た。彼は庭の柿の木を見ながら、たぶん、とつけ加えた。そうだと嬉しいんだけど。
狭い庭には雑草がぼうぼうに生い茂り、落葉も溜まっていた。涼太くんが勝手口から靴を取ってきてくれたので庭に下りた。足が埋まるほど草が伸びている箇所もあり、長靴を持ってこなかったことを早速後悔した。そうはいってもないものは仕方がない。わたしは背負ってきたリュックを縁側に置き、詰め込んであった軍手と小型の草刈り用の鎌を取り出した。
鎌を見た涼太くんは、ルヴァンに驚いたときのわたしに輪をかけて仰天していた。
「用意周到だな」
「ホームセンターで買ってきたのよ。これがないと大変でしょ」
ひとつしかない鎌は涼太くんの手に渡った。彼は自分では軍手すら持ってきていなかったので、三組百円で買ったものをひとつ譲ってあげた。
「こんなにえらいことになってるとは想像してなかったでしょ」
かがみ込んで縁側周辺の小さな雑草を抜いていきながら、同じようにかがんで、日当りがいい分よく育っている庭の中ほどの草と格闘している涼太くんの背中に向かって声を張り上げた。彼はいったん手を止めて、こちらを振り向いた。
「たしか、草むしりって聞いてた気がするけどな」
「素手で引っこ抜けるようなかわいい草じゃないね」
鎌の方が効率がいいのがわかると、時折担当を交代しながら、休み休み作業を続けた。
天気がよく、気温はそれほど高くはないはずだけれど、額にいっぱい汗をかいた。ふたりともとっくに上着を脱ぎ捨てていた。できれば腕まくりもしたかったけれど、虫除けスプレーを持ってきていなかったのでそれは我慢した。
いくら刈っても到底終わりそうにもないほど庭はひどい有り様だったけれど、何がそう

させるのか、わたしたちは途方に暮れることもなく手を動かし続けた。伸びすぎた雑草を刈りながら、あるいは根から引っこ抜きながら、草のすっとする匂いを嗅いでいると、いつしかある映像がわたしの頭のなかによみがえってきた。

小学校低学年の頃、いわゆるおてんば娘だったわたしは、縁側の端っこから勢いをつけてどれだけ遠くまで飛べるか、立ち幅跳びの要領で庭へ飛びおりたことがあった。たしか着地に失敗して、どちらかの足首を捻挫したのだった。部屋内に座ってその様子を眺めていた祖母が大慌てでとんできて、足首を押さえてうずくまるわたしに向かって、「千砂、千砂」と何度も名前を呼んだ。わたしは「おばあちゃん、痛いよ」といって泣き声を上げながらも必死に痛みをこらえていた。あのときの、わたしの痛みはまぎれもなく本物だった。心のなかで考えていたのは、ひたすらに「痛い」ということだけだったかもしれないけれど、それは間違いなくわたしのうちにあったものだった。頭のなかに映し出された映像を見ているうちに、何かしらひらめくものがあったような気がした。わたしは、それが失われてしまう前に、ひらめきの在り処を懸命に探った。

たった一日でぜんぶ刈るのは無理だった。帰りの新幹線の時刻が迫る頃、わたしたちはそう判断して途中で切り上げることにした。刈った草はビニール袋に入れて、母から場所を聞いていたごみ集積所に持っていった。ごみ出しの日までは調べていなかったけれど、心のなかでごめんなさい！　と叫んで、ぱんぱんに膨れたふたつのごみ袋をそっと置いてきた。

帰り際、時間調整のためと疲れを癒すため、枚方の駅前で喫茶店に入った。案内された奥の四人掛けの席に向かいあって座り、ふたり同時にため息を吐いた。

「ああ疲れた」

「ああ疲れた」

同じせりふを吐き捨てて、ふたりともソファにだらんと背中を預けた。

「いかに運動不足かがわかったよ」

涼太くんが嘆いた。

「いかに自分がちっぽけなのかもわかった」

わたしが彼を真似てぼやくと、涼太くんは笑った。

「大げさだけど、その通り」

「大げさなんかじゃない。わたしって、なんてちっぽけなんだろうって、草を刈りながら思ったの」

「大地から地球の根源的なものを感じたってこと？」

「そんなんじゃないけど、そうね、誰かに意味を見出してもらわないと自分を確認することもできないような、わたしっていう存在の、小ささや曖昧さを感じたとでもいおうかしら」

涼太くんは、おおと感心した声を上げ、「哲学だなあ」といった。

哲学なんかではないけれど、さっき草刈りをしながら気がついたのは、「心」が連続している事実は曲げられないのではないか、ということだった。

たとえ「わたし」が連続して存在していることに疑いを抱いてしまったとしても、生まれたときから持っている「心」の連続性を否定することは、できないのではないだろうか。

記憶を植え付けるとか取り替えるとか、まるでサイエンスフィクションのような大がかりな法螺が、もしもわたしに仕掛けられているのだとしても、わたしがここに人間として生きている以上ひとりにつきひとつ与えられているはずの心を持っているわけで、それは外部からのどんな刺激があろうとも、ちがうものに入れ替わるなんていうことはあり得な

いはずだ。心が自分に存在していることを他人に証明することは難しいかもしれないけれど、自分自身に証明することは至ってかんたんなのだ。だって、わたしは思考し続けているのだから。

わたしは運ばれてきたアイス珈琲に紙製のストローを差してひとくち飲んだ。何気なく涼太くんの方を見ると、彼も同じく頼んだアイス珈琲に、ミルクを、それからシロップを、それぞれ順番にたっぷりと注ぎ入れた。

「あっ」

思わず声を上げると、彼がふしぎそうにこちらを見たが、わたしは首を振って「気にせず、どうぞ、どうぞ」と笑った。余計に不審そうな表情になった涼太くんだったが、眉間にしわを寄せたままアイス珈琲をごくりと飲んだ。

座席の横には大きな窓があり、そこから見える空は青く晴れ渡っていた。でも、その空の青さは、絵の具の青に白をどれだけ混ぜるかで調節できてしまうような絵に描いた空と、実はそれほど差異はないのかもしれないと思った。見上げる人の気分ひとつで、空の色を明るくすることだって暗くすることだっていくらでもできてしまうのだから。

「あのさ涼太くん」わたしは視線を窓枠に置かれたベコニアに移した。「もし目の前で誰かが絶望していたら、どうする？」

「今度は絶望か」彼は軽く握った指を口もとに当てて、考えるふりをした。「その答えを探すのは、絶望という名のご馳走を食べてからにしようか」

彼の視線の先には、腰にエプロンをつけた店員さんがきわどいバランスを保ちながらトレイを運んでくる姿があった。やがてわたしたちのテーブルに置かれたのは、生クリームがたっぷりのったアイスクリームの大きな鉢だった。涼太くんがチョコレート、わたしがバニラで、それぞれディッシャーにみっつ分ずつ盛りつけられていた。わたしたちは競うようにアイスクリームを食べた。時折相手の鉢からもすくって食べた。

「霧島さんも、虎に出会う前にアイスクリームを食べていればいいのに」

口についた生クリームを紙ナプキンで拭きながら呟いた。涼太くんが「ん？」と顔を上げたけど、わたしは肩をすくめて、なんでもないと答えた。

アイスクリームを食べたら冷たいと思うし、怪我をしたら痛いと思う。そうやって思うことだけは、ほかの誰にも侵食されることのない、わたしだけのものだった。

物心ついたときから、いや、思考というものの定義を、見たことを「見た」と（言語ではなく感覚で）判断していくことにまで広げるとすれば、生まれて間もないときからすでに、思考し続けてきた。それはわたしのもともとの思惑とはちがった方へ向かうこともあったし、いささか危険な状態に陥ることもしばしばあったけれど、わたしが思考しているという事実が曲げられることは、決してないのだ。

もし、両親や涼太くんと共有している世界がほんのすこしずれていたのだとしても、その世界のなかで、わたしはこれまで読んだ本に影響され、観た映画に動かされ、心を育んできた。つまらなく物足りない人生のように思っていたけれど、少なくともわたしはつまらないなりの思考を、途切れることなく持ち続けてきたのだ。

わたしがわたしであることは、思考の、心の連続性をもって証明され得るのではないだろうか。それはあたり前でいてとてもあやふやなことで、ちょっとした拍子に見失ってしまうような不確かな指標ではあるけれど、自分自身のことを地面に足をつけてちゃんと立たせておいてやれるくらいには、明確な事実なんじゃないだろうか。あとは、わたしがこの世界を受け入れるかどうかということだけなのかもしれない。

そんなことを考えているうちに、手の甲に触れるものがあってそちらに視線を移すと、ベコニアから飛んできたのかちょうど小指の骨の延長線上を小さなてんとう虫がせかせか

と歩いていて、時折蛇行しながらも確実にどこかを目指して進んでいるように見えた。やがててんとう虫は手首のあたりにまで到達し、気を持たせるかのようにちょっと静止したあと、飛び立った。その動きに目を奪われていたわたしはそこで我に返り、はっとなって顔を上げた。すると、こちらに向けられた涼太くんの笑顔がその瞬間揺らいだような気がして、わたしはくらくらした。

（了）